
《天之女神 - 討魔伝記》 ~ BASTAR・闇を狩る者 ~

水樹ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《天之女神 - 討魔伝記》 ～ B A S T A R ・ 闇を狩る者 ～

【Nコード】

N 2 9 7 1 Z

【作者名】

水樹ヒロ

【あらすじ】

滅亡寸前の世界に現れた赤衣着物の少女…。

その手には、意思を持つ一振りの剣があった。

突如として現れた謎の生物【クリーチャー】を相手に、少女は今日も戦場を赤く染める…。

赤衣着物の少女

時は、西暦2015年9月。

日本から南極の調査に来ていた、とある大学の一団が謎の微生物を発見した。

一団は凍眠状態だったその未知なる微生物を調査する事に決定。

世界中の有名大学や各国の研究機関も南極へ向かい、合同調査が開始された。

西暦2016年11月。

東京近郊で、正体不明の化け物を目撃する事件が発生。

警視庁と防衛庁が合同で調査隊を派遣するも、原因は不明。

同時期：謎の微生物を研究していた南極調査隊や研究員らが突然、消息を絶つ。

西暦2017年2月。

世界各地に人型の化け物が一斉に姿を現した。

国連は異常事態宣言を発令。化け物を【クリーチャー】と呼称し、各国の軍隊がクリーチャーの掃討に乗り出した。

しかし…異常なまでの高い繁殖能力を持つクリーチャーに手も足も出ず、半年で発展途上国は壊滅。

先進国の各国も、自国を必死に死守していた。

西暦2019年6月。

アメリカ・ロシア・ヨーロッパ・中国そして、日本を残し…世界の各国は全て壊滅的被害を受けていた。

国連は、対クリーチャー特殊戦術部隊【BASTAR】を設立。

イギリスへ本部を…そして日本へはその支部を設立した。

それと同時期、対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】の開発を開始。

西暦2020年4月…。

対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】が完成。

クリーチャー迎撃の最前線基地である日本のBASTAR支部【グ
ラスハイム】へと移送した。

そして…クリーチャーへの反撃を開始すると、BASTAR本部【
Noa】は残存する各国へ声明を発表。

そして…現在。

西暦2020年10月…。

東京・渋谷駅前。

…ザンツ！

ポロポロのアスファルトに突き刺さる一振りの剣…。

クリーチャーの死骸が辺り一面に横たわっている中心に、一人の少
女が立っていた。

返り血を浴びた顔…そして、血のように真っ赤な衣を纏った少女の名は、【井上瑠奈】…。

瑠奈は剣の柄を掴むと…引き抜いて鞘に納め、バス停のベンチに座った。

「あの賑やかだった渋谷も、今やクリーチャーの巣窟か。」

ババババ…

瑠奈が空を見上げると、輸送ヘリがゆっくり降りてきた。

「お迎えが来たみたいね…帰りましょうか。」

「…お疲れ様でした、井上隊長。」

ヘリから降りてきた隊員が、瑠奈に語りかける。

「お疲れ様。」

瑠奈は椅子に座ると剣を鞘から抜いて、刃の手入れを始めた。

「【赤き疾風】井上瑠奈。十八歳の若さで、日本支部で一番のクリーチャー掃討数を誇るエース。」

「ん?…」

瑠奈が顔を上げると、アメリカ人の少女が笑顔で立っていた。

「封魔の使い手に任命され、B A S T A R 第一戦闘部隊【 】の部隊長となったつ。」

「リイナ、お世辞は止めなさい。」

「はあい。」

リイナと呼ばれた少女は瑠奈の隣に座り、刀を見つめた。

「最初：対クリーチャー用白兵戦兵器って聞いて、どんなに凄い兵器かと思いきや。」

「見た目は普通の刀ですな。」

一般隊員が取っ手を掴んで、バランスを取りながら封魔を見つめた。

「封魔、調子はどう?」

瑠奈が語りかけると、封魔の柄にある宝玉が光り輝いた。

『非常に良好です。』

「そう。」

瑠奈は封魔を見つめ、初めて微笑んだ。

「先輩は本当凄いですよねえ?」

「何を言っているの。五歳でアインシュタインの方程式を解いたIQ250の奇才リイナ・カーディガル。貴女の方が凄いわ。」

「たまたまですっ、たまたま。」

瑠奈とリイナが会話していると、ヘリに通信が入った。

《こちら、BASTAR日本支部グラスハイム…どちらの部隊か？》

「こちら、クリーチャーの掃討に出ていた 部隊。ヘリポートへの着陸許可を。」

《了解。三番ヘリポートを利用して下さい。》

「着いたみたいですね？」

「そうね。」

瑠奈が窓から外を見ると、巨大なビルが立っていた。

旧サンシャインシティ及びその一帯を改築したBASTAR日本支部、通称【グラスハイム】のメインビルである。

「ようやく、一息つけるか…。」

「先輩？」

「ん？…なんでもないわ、それよりベルト締めなさい？着陸するわよ。」

「はあい…！」

へりがヘリポートに着陸した後、瑠奈が降りるとリイナが追いかけてきた。

「先輩はこのまま、司令の所へ報告に向かいますよね？」

「ええ。」

「わかりました。先に、隊のオフィスへ戻ってます。」

「そうして?...うるさい馬鹿の相手、頼むわ？」

「了解ですっ！」

瑠奈はグラスハイムのメインビルに入ると、エレベーターで最上階に向かった。

瑠奈は顔をハンカチで拭きながら廊下を歩いていくと、支部長の部屋の脇にある司令官室の前で立ち止まった。

「部隊所属：井上瑠奈です。入ります。」

瑠奈が室内へ入ると...窓から外を眺めていた、中年のイギリス人男性が振り返った。

「瑠奈...帰ったか。」

「はっ、クリーチャーの掃討完了しました... balan・シュノーケル司令官。」

「ふっ...相変わらず、真面目だな？」

balan と呼ばれた男は瑠奈に振り返ると、彼女の顔を見つめ微笑んだ。

「だいぶ返り血で汚れたな？…その綺麗な顔が台無しだ。」

「構いません…容姿など気にしては、戦いは出来ませんから。」

「そうか…。」

balan はソファアームに座ると、瑠奈を向かい側に座らせて目の前のテーブルに書類を置いた。

「これは…？」

「次の作戦に関してだ。」

「…。」

「帰還してすぐに申し訳ないが、今度は京都へ向かってほしい。」

「京都…？」

瑠奈は書類を手に取り、目を通した。

「京都祇園のクリーチャー掃討作戦…。」

「そうだ。現在の自衛隊は今までの激戦で疲弊しており、部隊の再編成に集中させてやりたいのだ。」

「それまでの時間稼ぎ…ですか。」

「自衛隊の再編が完了すれば、戦いもだいぶ楽になる。それまでは、何とか我々だけで頑張るしかないのだ。」

「了解しました。では、13:30時にグラスハイムを発ちます。」

「すまんが、よろしく頼む。」

瑠奈が立ち上がり、部屋を出ようとした時…バランスが語りかけた。

「…瑠奈。」

「はい。」

「帰って来た時くらい、肩の力を抜いてはどうだ？」

「…抜いています。」

そう呟くと…瑠奈は静かに部屋を去った。

「感情を殺し、クリーチャーへの復讐に燃える戦鬼か。」

バランスはソファーに寄りかかると、ジッと天井を見つめた。

「…無理もないわい。あんな事件があれば、誰しもああなるう。」

バランスが振り向くと、日本人の老人が歩いてきた。

「黒田健一郎支部長…。」

「瑠奈はクリーチャーの日本侵攻時、激戦区だった千葉に住んでおった。」

「あの事件が無ければ…彼女が人間としての感情を失う事もなかったろうに。」

「うむ、可哀想な娘じゃて…。」

エレベーターで降りる瑠奈。

『瑠奈、体力回復を優先しましょう。』

「ええ、ちよつと疲れた。」

瑠奈はエレベーターを降りると、更衣室へ向かい…着物を脱いで、シャワーを浴びる事にした。

シャワーを浴びた瑠奈が髪を乾かしていると…一人の女性隊員が歩いて来た。

「あら、まだ生きてたの？」

「…それは、こっちの台詞。」
「微笑みながら俯く女性隊員。」

「相変わらずね。ま、無事で良かったわ？」

「当たり前。」

瑠奈はバスタオルを彼女に被せ、自分のロッカーに向かった。

「全く…少しは愛想良くできない〜?」

「私なりにしてるつもりよ…。」

苦笑いしながら歩み寄ると、女性隊員は瑠奈の頭にバスタオルを被せた。

「仕方ない娘ね?…そんなんじゃない、男も寄ってこないわよ?」

「恋愛なんか…興味ない。」

瑠奈はB A S T A R Rの制服に着替えると、着物と帯を手にとって口ッカーを閉めた。

「感情や思いだけじゃ…誰も救えやしない。」

「瑠奈…。」

「私は…力が欲しい。クリーチャーを皆殺しにする力が…。」

「…。」

「…じゃあ、失礼するわ。」

「瑠奈っ!」

女性隊員が去ろうとした瑠奈を呼び止めると、歩み寄った。

「…何？」

「貴女は一人じゃない…それだけは、分かって。」

「…。」

瑠奈は俯くと…振り返って静かに去っていった。

「シグナル隊長。」

女性隊員に他の隊員が話しかける。

「何？」

「井上隊長つて、愛想ないですよねえ？」

シグナルと呼ばれたその女性隊員は、彼女の発言を聞くと静かに俯いた。

「事の詳細を知らない貴女達には、そう見えても仕方ないか。」

「シグナル隊長？」

「なんでもないわ？気にしないで。」

「は…はあ…。」

女性隊員達が首を傾げるなか、シグナルもまた更衣室を後にした。

『瑠奈。』

「何？封魔。」

『 隊オフィス内から少量の火薬を確認しました。恐らく…。』

「はあ…また、あの馬鹿か。」

瑠奈が頭をかきながらオフィスに入ると…イヤホンを付けたアメリカ人の男性隊員が、椅子に座りながら机上へ足を置き…何かの曲を聴いていた。

「フンフン！オツ、イエ…イ!?!」

男性隊員の首元に、封魔の刃が不気味に光る。

「この前、オフィス内で武器の解体はするな…と言った筈よね、レオン？」

「る、瑠奈…！ちよっ！わ…忘れてたわけじゃ。」

「レオン・ハイフォード上級戦闘員…上官をファーストネームで呼ぶの？」

「ひいっ！井上隊長、ごめんなさいっ！」

「分かれば良いの。」

封魔を鞘に戻すと、瑠奈は隊長席へ座った。

リイナが笑顔で席を立ててカップにコーヒーを注ぐなか、瑠奈は次

の作戦の説明を始めた。

「全員：13：30時になったら、ヘリポート入口に集合。」

「もう次の任務ですか？先輩。」

「ええ。」

「今度はどちらに？」

「京都へ向かう。」

「京都？」

「そう…自衛隊再編の時間稼ぎも兼ねた、クリーチャー討伐作戦よ。」

「先輩…ひとまずコーヒーでも飲んで、ゆっくりして下さい？」

「ありがとう、リイナ。」

リイナが瑠奈へコーヒーを手渡すと、レオンが羨ましそうに見ていた。

「リイナちゃんっ、俺のは？」

「自分でやってっ！」

「ちえっ！…ん？そういや、あのぜい肉君はどうした？」

レオンが室内を見渡すと、リイナが答えた。

「ウイン・リイ下級戦闘員？そういえば、私も見てない。」

「ったくよお！大事なミーティングの時間にどこ行ってんだあ？あいつ。」

「その【大事なミーティングの時間】に、机の上へ卑猥な本を広げてるのは、何処のどなたかしら？」

「あつ！やべつ！」

コーヒーを飲みながら瑠奈が呟くと、レオンは慌てて本を机の引き出しにしまった。

「思春期の学生じゃあるまいし…。」

リイナが呆れた口調で言いながら、冷たい視線をレオンに送る。

「あんまり酷いと、リイナの教育に悪いし…セクハラで訴えようかしら？」

「か、勘弁っ！」

「リイナ…ウインには、今話した件を伝えておいて？多分、ヘリポートでヘリの整備をしてくれてるんでしょ。」

「はいっ！」

「じゃ、時間はあまり無いから解散。昼休み後、ヘリポート入口に集合…良いわね？」

「了解ですつ。」

「へいへい。」

「…じゃあ、また後で。」

「じゃあ瑠奈、俺と一緒に飯を食いに…」

レオンが笑顔で食事を誘うも…瑠奈は完全に無視して、オフィスから出ていった。

「無視…。」

「当然！先輩があんたみたいなのと行くもんですかつ！」

「けっ！…リイナ、一緒に飯…。」

「断じて、行かないっ！！！」

宿舎の自室へ帰り、外の景色を眺める瑠奈。

『瑠奈。昼食摂取によるエネルギー回復を。』

「分かってる。」

ベッドの上に着物を投げて、部屋を出ようとした瑠奈は…ふと机にある写真を見つめた。

そこには…二人の友人と一緒に笑顔で写っている自分の姿があった。

「…佳苗。」写真立てを手に取り…懐かしそうに見つめる瑠奈。

「!?!」

その時…彼女の脳裏に、映像が浮かんだ。

高校の制服を赤く染めた瑠奈が腰を抜かして座り込む目の前で、友達がクリーチャーに追い詰められている。

「た、助けて…。」

「や…やめて。」

瑠奈は震えながら必死に懇願するも…クリーチャーは怯える友人に向かって、一斉に噛みついていった。

「うあああつ!?!」

「!?!…だあつ!」

『瑠奈!?!』

瑠奈は自室の入口に頭を打ち、現実に戻ると…額から血が流れてきた。

『また…いつものですか?』

「くっ!?!…大丈夫、行きましょう。」

瑠奈は額をハンカチで押さえると、止血しながら自室を去っていった。

「近頃、また頻繁にアレを見るようになった…何故？」

昼食後…。

へりポートに集まる 部隊のメンバー。

瑠奈も衣に着替えると封魔を腰に差し、へりポートへ向かった。

「…お！来た来た、我らが隊長さんが！」

肩に自動小銃を担ぎ、レオンが冷やかす。

「隊長っ！へりの整備で時間忘れてたッス！」

小太りの少年が慌てて瑠奈の前に立つや敬礼した。

「ウイン…次からは気をつけなさい。」

「はいッス！」

「リイナ、へり内でブリーフィングをしたいんだけど。」

「そうだと思って、先程…管制室のレイチエル管制官から作戦内容のデータをいただけてきました！」

「ありがとうございます…じゃあ、行きましょうか。」

「了解ッス！」

ウィンが走っていき、ヘリの運転席に座るとエンジンを起動させた。
プロペラが回り、風が吹き荒れる。

「行くわよ。」

瑠奈が衣をなびかせながら歩いていく。

「待つてくださ〜い！」

リイナも走って瑠奈の後についていく。

「へいへい…んじゃま、行きますかねっ！」

レオンも走って乗り込むと…ヘリの後部ハッチが閉まり、ゆっくり
上昇していった。

西の京都へ向かって飛んでいくヘリの中…。

リイナが京都周辺の地図を広げ、自分のミニパソコンを立ち上げた。

「今回の作戦は、京都祇園に潜伏しているクリーチャーの排除です。」

「祇園かあ…観光で一度【ゲイシャ】ってのを見に、行ったことあるな。」

「レオン、黙りなさい…続けて。」

「ちえつ。」

「はい！クリーチャーは八坂神社から花見小路・新橋通など…広い範囲に分散しています。先輩とレオンは京都の上空へ到達次第降下…直ちに排除を開始して下さい。」

「了解だ…おい、ぜい肉君っ！京都まで、あとどんくらいだ？」

「あと一時間ちよつとツス…それから、その呼び名は止めてほしいツス！」

「なんだよ？嫌なのか？」

レオンはウインの頭を後ろから掴むと、ニヤニヤしながら問いかけた。

「瑠奈さんの前で、ぜい肉ぜい肉って言ってほしくないんす！」

「ん？そついや、お前…瑠奈に気があんだっけ？」

「…呼んだ？」

レオンとウインの後ろへ、瑠奈が首を傾げながら歩み寄ると…ウインの顔が真っ赤になった。

「い、いえっ！！なんでもないツス！」

「…お前、絶対マゾツ気あんだろ。」

「ウイン、京都上空に到達次第…後部ハッチを開放して。」

「りよ…了解ッス！」

「レオン？作戦前よ…ふざけてないで、集中。」

「へえへえ！」

へりが西へ向かう事、一時間…。

「うん…先輩、京都上空へ間もなく到達します！」

「了解…アシスト頼むわ？」

「お任せ下さいっ！」

「んっ…行くわよ？封魔。」

瑠奈が語りかけると、封魔の柄にある宝玉が光り輝いた。

『全システムのチェック完了。問題ありません。』

「了解。」

瑠奈はパラシュートを背負い、後部ハッチから飛び降りると…地上へ一直線に降下していった。

「隊長さんってば、張り切っちゃってよお？」

「レオン、後続！ぐぐだくだ言わないっ！」

「あいよ。じゃあ…行ってきますかねえっ！」

レオンも後部ハッチから飛び降りると…リイナとウインが乗っているヘリは、ハッチを閉めて京都上空をゆっくり旋回し始めた。

「クリアチャー・リーダーCR、オンつと…先輩、無線聞こえますかっ！」

降下中の瑠奈にリイナが無線を飛ばす。

「…聞こえてるわ。」

パラシュートを開いてゆっくり降下していた瑠奈は、付けていたイヤホンマイクでリイナに返事をした。

《先輩の真下…二時の方向に、クリアチャー反応が三体あります。》

「了解。」

《瑠奈。離れて降下すんのか？》

「…あなたには、近くにいてほしくないからね。」

《ひ、ひでえ…。》

《あははっ！…では、御武運をつ！》

瑠奈は八坂神社の境内前に降下すると、パラシュートを外した。

「レオン…あなたは花見小路方面からクリーチャーを排除しつつ、こちらに向かいなさい。」

《あゝいよっ!》

「…何、ふて腐れてるのよ。」

首を傾げると、瑠奈はゆっくり歩きだした。瑠奈が参道を歩いていくと…辺りに風が吹き出し、境内周辺の木々が風になびいた。

「…。」

鞘に手をやり、親指で封魔を押し出す瑠奈。

「…グアアアアツ!」

すると…木の上から現れた一体のクリーチャーが、瑠奈へ襲い掛かった。

「…はっ!」

瑠奈が抜刀斬りで飛び掛かってきたクリーチャーを両断すると…目の前の鳥居の先にある階段から、二体のクリーチャーが涎を垂らしながら歩いてきた。

「クリーチャーは…。」

風に髪をなびかせながら、封魔を横に振って静かに握り直す瑠奈…。

「…皆殺しだ。」

瑠奈が封魔を握って呟くと…クリーチャーは彼女へ一斉に襲い掛かった。

「はああ！」

瑠奈が封魔を勢いよく振るった瞬間…木々に隠れていたカラスの群れが、鳴きながら一斉に飛び立った。

カア！カア！

カラスの鳴き声が響くなか…無惨に転がるクリーチャーの死骸。

刃についた血を払い落とし…瑠奈は封魔を鞘に納めると、参道を再び歩いていった。

「ん？」

瑠奈がふと空を見上げると…ポツポツと雨が降りだした。

「雨か…ん？」

瑠奈は道沿いに壊れた売店を見つけると、歩いて行って和傘を手にとった。

「すみません…傘を一本、お借りします。」

瑠奈は壊れた売店に頭を下げ、和傘を開くと…八坂神社を後にした。

「封魔、クリーチャー反応は？」

『現在、周囲に反応はありません。引き続き、警戒します。』

「お願い。」

瑠奈は雨の中、和傘をさして歩いていくと…遠くで銃撃音が聞こえた。

「あの音…今日は、まともに仕事しているみたいね。」

「…ぬわあぁっ！」

瑠奈が振り向くと…レオンが血相を変えて、路地から走って来た。

「レオンッ!？」

「瑠奈っ!」

レオンが瑠奈を見て、笑顔で叫ぶと…背後から二体のクリーチャーが彼目掛け飛び掛かった。

「!…レオン、しゃがみなさい!」

「はっ!？わ…分かったっ!」

レオンの背中に飛び乗り、封魔を抜く瑠奈。

「うおっ!…ん?こりゃあ。」

「今、上を見たら…あんたの大切なとこ、切り刻むわよ。」

「け、決して見ません…。」

「はぁあっ!」

瑠奈はレオンを踏み台にして飛び上がると…一体のクリーチャーの顔面に蹴りを放った後、もう一体のクリーチャーへ廻し蹴りを放った。

瑠奈は着地すると間髪入れず、落下したクリーチャーへ走っていった。

「はぁっ!」

横払い…斬り下ろしと二体のクリーチャーを両断する瑠奈。

「レオン、あと何体?」

「はぁ?」

「あんたが逃げてきた時に追ってきたクリーチャーは、あと何体?」

「あ、ああ…八匹いやがつて、内二匹は撃ち殺したから…。」

「今、二体倒したから…残るは四体か。」

痙攣しているクリーチャーの頭を踏み潰すと…瑠奈は封魔を払って血を落とし、鞘に刃を納めた。

「和傘…。」

先程、八坂神社で拝借した和傘をさして歩いていく瑠奈。

「瑠奈っ！」

「レオン…あなたは、この場で待機。」

「た、待機だあ！？冗談じゃねえ！俺はまだやれ…！？」

レオンが叫ぶなか、瑠奈はゆっくり振り返ると…彼の自動小銃を指差した。

「クリーチャーにやられて使えないんでしょう？それ…。」

「うっ…。」

「大丈夫よ…あとは、私がやるわ。」

瑠奈がそう告げて去っていくと…レオンは苦笑いしながら、頭を掻いた。

「参ったな…全てお見通しかよっ。」

一人、新橋通りを歩いていく瑠奈。

「…。」

そんな彼女を追うように…クリーチャーの影が気配を殺して、彼女の背後から近づいていた。

「…来た。」

立ち止まり…瑠奈は傘を上へ放り投げると同時に廻し蹴りを放つと、背後から走ってきたクリーチャーの顔面に命中して雨で濡れた地面を滑っていった。

「グアアッ！」

家屋の壁を突き破って襲いかかるクリーチャーに、封魔の鞘で殴りかかる瑠奈。

『瑠奈、屋根から二体。』

「!…はあぁっ！」

クリーチャーを殴りつけた格好のまま…瑠奈は鞘から封魔を抜いて、抜刀斬りを放った。

「はあ！」

抜刀斬りで一体を両断するも、もう一体の爪が瑠奈に迫る。

「!…くっ。」

バンッ!

瑠奈が目を閉じた瞬間…クリーチャーは、こめかみを撃ち抜かれて地面に倒れた。

「!?!」

「瑠奈っ！大丈夫か！」

鞘で殴りつけたクリーチャーを両断した後、封魔を払った瑠奈へレオンが駆け寄った。

「レオン、あんた…。」

「こちらら、元・軍人だ。小銃がやられた時の準備くれえしてるぜっ。」

拳銃を構えてレオンが笑う。

「ふっ…借り、作っちゃったわね。」

「よりもよって、俺に…てか？」

「ん？…そうね。」

瑠奈は微かに微笑むと、レオンは苦笑いを浮かべた。レオンが後ろに振り返って拳銃を連射すると、頭と胸に弾を数発浴びてクリーチャーが倒れた。

「あと…。」

「…一体。」

瑠奈は血に染まった封魔を払い、クリーチャーと睨みあった。

雨が封魔と瑠奈を濡らす…。

「グアアアッ！」

走ってくるクリーチャーに対し…身構えず、そのままの態勢で待つ
瑠奈。

「…はっ！」

瑠奈はすれ違いざまに封魔を振り下ろすと…クリーチャーは斜めに
両断され、真っ二つになった。

「終わりか…。」

「この辺りは、ね…リイナ！」

《はい、先輩！》

上空で旋回中のへりにいるリイナへ、通信を送る瑠奈。

「八坂神社に着陸出来る？封魔のエネルギー補充と…私の隣にいる
馬鹿へ、予備の自動小銃を。」

「瑠奈…。」

《了解しました。》

「サンキュ。」

「あんたも一応…隊の戦力だから。」

「そうかい。」

レオンは微笑むと和傘をさして…雨で濡れた瑠奈に歩み寄った。

「濡れちゃったし…もう必要ない。」

「そう言うなって。俺達の大事な隊長様に、風邪などひかれては困りますっ。」

「ふっ…お調子者。」

瑠奈はレオンにそう呟くと…苦笑いしながら傘に入って、一緒に歩いていった。

「もう少し愛想が良けりゃあモテるだろうつによぉ。」

「あんに言われたくない…。」

「か、可愛くねえ…。」

「…。」

「ん？もう来てんのか。」

「みたいね…。」

瑠奈とレオンの二人が八坂神社に到着すると…既に着陸していたへりからリイナが顔を出した。

「先輩っ！」

「…リイナ。」

「ふふふ、お二人共々！雨、もう上がってますよ〜！」

「ん？…おっ、マジだ。」

レオンが空を見上げると、雨雲の隙間から綺麗な青空が覗いていた。

「じゃあ、傘をさす必要は無くなったわね？…レオン、あのお店に返ってきて。」

「へえへえ！」

苦笑いしながら壊れた売店へ走っていくレオンを、笑顔で見つめる
瑠奈。

「リイナ、へリを出すわよ。」

「了解ですっ。」

「！…ちよっ、おいてく気がよっ！おいつ！」

慌てて走ってくるレオンを尻目に、瑠奈は笑っているリイナと共に
へリへ乗り込んだ。

井上瑠奈

飛行中のヘリ内にて…リイナが簡易点検装置を使い、封魔のメンテナンスを始めた。

「レオン、あなたは周囲の警戒。」

「了解。」

「ウインは、グラスハイムが近づいてきたら教えて。」

「了解ッス！」

封魔が収納されている簡易点検装置のキーボードを、リイナは慣れた手つきで操作し…装置を起動させた。

瑠奈はリイナの後ろで、腕組みをしながら立っている。

「…どう？」

「エネルギー補充はすぐに済みますが…ちょっと整備が必要みたいです。」

リイナがモニターを指差した。

「回路の一部に異常を見つけました。グラスハイムでしっかり見た方が良さそうです。」

「そう…分かったわ。」

へりが東京に向かい…プロペラを勢いよく回転させながら飛んでいく。

「よういっしょっと！」

レオンは椅子に座るともたれ掛かって、背伸びをした。

瑠奈も椅子に座ると、封魔を点検中のリイナに話しかけた。

「リイナ。」

「はい？」

「グラスハイムに着くまで仮眠をとるわ…着いたら起こしてくれる？」

「了解しましたっ、ごゆっくり。」

瑠奈は脚を組むと、静かに目を閉じた。

そんな瑠奈を見つめながら…レオンは静かに、リイナの所へ向かった。

「寝顔だけ見るとよお…普通の女の子なんだけどなあ？」

「だよな？…けど、【あの事件】以降…先輩はああなっちゃったの。」

「あの事件？」

「レオン、知らないんだ…。」

「ん？」

「先輩…クリーチャーが日本へ攻めてきた時、目の前で友達を殺されたの。」

「なっ！…マジかよ？」

リイナはモニターを睨みながら頷いた。

「うん…目の前で友達がクリーチャーに噛み殺された後、体をバラバラにされたらしいよ…。」

「よく助かったな？…あいつ。」

「先輩が襲われた時…たまたま近くで戦闘していたバラン司令が見つけて助けたらしいの。でも、それ以来…先輩の心は閉ざされたまま。」

「そうか…。」

レオンとリイナは眠っている瑠奈を見つめ…黙り込んだ。

「先輩は…親しい友達を守れなかった罪に苛まれてるんじゃないかな。だから、誰とも仲良くしないんだと思う…失うのが怖いから。」

「けど…俺にゃあ、ただの現実逃避にしかみえねえぜ？」

「レオン…世の中には、貴方みたいに心の強い人間ばかりいるわけじゃない…。」

「…まあ、な。」

「…。」

夕暮れ時となり…へりは明かりの見えない地上を見下ろしながら、東へと飛んでいった。

暫くすると…街の輝きが見えてきた。

「グラスハイムまで、あと少しか。」

「先輩、起こしてくる。」

「ああ。ぜい肉君、安全運転で頼むぜっ?」

「その呼び名、嫌いッス!」

三人が話しをしているなか…瑠奈は脂汗をかきながら、うなされていた。

「うう…。」

「助けてって言ったのに…。」

「か、佳苗…。」

「見殺しにするなんて…。」

「見殺し…なんか。」

暗闇の中…血みどろになった親友の佳苗が、瑠奈にゆっくり歩み寄ってくる。

「なんで、助けられなかったの？あんなだけのうのと生きて…恨めしい。」

「ち、違う…私だって…私だって、佳苗を助けたかった！」

佳苗は瑠奈の肩を掴むと…耳元で囁いた。

「この…人殺しっ！」

「！…ち、違うっ！！私は人殺しなんかじゃないっ！」

「…きゃあっ！」

瑠奈が叫びながら飛び起きると…リイナは驚いて、尻餅をついた。

「はあ…はあ…ご、ごめんなさい？リイナ。」

「せ、先輩…大丈夫ですか？だいぶ、うなされてましたけど…。」

「平気…それより、もうグラスハイム？」

「はい。」

「了解、ありがとう。」

瑠奈は外を眺めると…グラスハイムのメインビルがライトで照らされていた。

「ワイン、着陸態勢。」

「了解ッス！」

瑠奈がワインに指示をすると、レオンが心配そうな表情で歩いてきた。

「瑠奈…本当に大丈夫か？」

「レオン？…大丈夫って、言っているでしょう。」

瑠奈は俯くと悲しい眼差しをしていた。

グラスハイムのヘリポートで、誘導員がヘリに合図を送る。

「…よし！着陸したッス。」

「お疲れ様…皆、次の命令があるまで待機。」

「先輩、封魔を。」

リイナから封魔を受け取ると、瑠奈は腰に差した。

「ありがとう…私は研究室に行くわ。何かあったら、携帯か研究室に連絡を。」

「了解！」

瑠奈はヘリポートを後にすると、グラスハイムのメインビル内にあるエレベーターで…地下の研究区画へ向かった。

瑠奈はエレベーターを降り、通路を歩いていくと…研究室前へやって来た。

「失礼します。」

「ん？瑠奈じゃないの…元気そうで何よりね。」

瑠奈が室内に入ると、白衣を着た三十代の女性が優しく微笑んで迎えてくれた。彼女の名は、和田玲子。

グラスハイム研究室の研究室長を務めており、封魔のメンテナンスも担当している。

「和田教授…封魔のメンテナンス、良いですか？」

「構わないわ？座ってなさい。」

「はい。」

和田教授に封魔を手渡すと、瑠奈は近くにあったソファーに座った。

「瑠奈？シグナル隊長が心配していたわよ。」

「また…ですか。」

呆れた表情で俯く瑠奈を見て、和田教授は苦笑いしながら話しを続けた。

「歳も近いし、心配なのよ？お姉さま肌だしね。」

「私には、お高いお嬢様のようにしか見えません…。」

「ふふふっ、またすぐそういう意地悪をつ…ん？なるほど…エネルギー供給回路に異常か…リイナちゃん、さすがね？」

「リイナ、ですか？」

瑠奈がキョトンとしながら問いかけると、和田教授はパソコンのモニターを見つめながら頷いた。

「前以て連絡があつたのよ…封魔の回路に異常を発見したって。」

「そうでしたか。」

「リイナちゃん…貴女を姉のように慕ってるみたいだし、優しくしてやりなさいね？」

「…努力します。」

「失礼しますわ？」

和田教授が瑠奈に微笑んでいると、研究室へ用事があつたのか…シグナルが入ってきた。

「シグナルっ、瑠奈も来ているわよ？」

「あ、瑠奈っ。」

「…。」

ジッと、シグナルを見つめる瑠奈。

「どうしたの？何かあった？」

「な…何でもない。」

「ふふふ、恥ずかしいのよ。」

「ち、違いますっ…！」

赤面しながら慌てる瑠奈を見て、シグナルは優しく微笑んだ。

「良かった、無事で…心配してたんだから。」

「あ、ありがとう。」

「えっ…。」

「あらっ。」

笑顔で見つめ合うシグナルと和田教授を見て、瑠奈は首を傾げた。

「？…和田教授、何か。」

「何でもないわ…ねえ？」

「ええっ！」

「な…何なんですっ？わ、私だってお礼くらい言います。」

「ふふふっ！」

「瑠奈！今、一階にある喫茶店のケーキが女性隊員の中で評判なの！一緒に食べ行かない？」

「ケーキ？…わ、私はちよっと。」

「行ってきなさいな？封魔のメンテナンスは、まだ時間かかるから。」

「は…はあ…。」

「瑠奈っ、早く早く！」

「ちよっ…ちよっと！シグナル、手…引っ張らないで！」

シグナルが嬉しそうに笑いながら瑠奈の手を掴み、走って研究室を出ていった。和田教授はそんな二人を見て微笑むと、再びパソコンのモニターを見つめた。

「やれやれ…瑠奈も、もう少し心を開いてくれれば良いんだけど。」

教授がキーボードを操作していると、モニターを見て…眉をピクッと動かした。

「何？…このシークレットは。」

和田教授は突如画面上に現れたデータを調べていくと…0と1の数式が画面一杯に現れた後に、見たこともない景色や見知らぬ人物が次々にモニターへ映し出された。

「な…何なの。」

慌ててキーボードを操作する和田教授。

「操作不能？…な、何が起きているの。」

暫くすると…画面は光りを放ち、一人の女性が画面上に姿を現した。

「だ、誰…。」

教授はモニターの女性を見つめ…啞然としていた。

《あまのめがみ天之女神…それは、日本神話に語られる事がなかった幻の女神。》

「天之女神？…封魔にはまだまだ沢山の謎がありそうね？…え？」

頷いていた教授がふとモニターを見ると…画面上には【井上瑠奈】と、瑠奈の名が表示されていた。

「瑠奈？そういえば…どうして当時BASTARに入隊していなかった彼女を、封魔が使い手に選んだのか…そこから謎を解いていかなくってはならないみたいね。」

和田教授が腕組みをして考え始めた頃…瑠奈はシグナルに連れられ、一階にある喫茶店の前でメニューを見つめていた。

「瑠奈、これよこれ！」

「?…このケーキが？」

「そう！女性隊員の中で噂になってるのよ！」

「よく…わからない。」

瑠奈が俯くと苦笑いするシグナルの後ろへ、雑用を終えたリイナが笑顔で歩み寄った。

「シグナル隊長つ…あ、先輩も！珍しいですねっ？」

「リイナ、あなたもケーキ目当て？」

「はいっ、先輩達もですか？」

「!…そうなの、一緒に食べましょ？奢るわよっ。」

「えっ、本当ですかっ！じゃあ…ご一緒させていただきま〜す！」

喜ぶリイナを見ながら、シグナルは笑顔で振り返った。

「瑠奈…もう逃げられないわよ？」

「はあ…もう、好きにして。」

溜め息をついた瑠奈を見て、シグナルとリイナは笑顔でハイタッチした。

「ん？…あ！さては、最初から仕組んでいたのねっ！？」

「まあまあ！」

「先輩、とにかく入りましょう！」

「ちよっ…リイナ！？シグナルまで！」

シグナルとリイナに両脇から腕を組まれ、無理矢理喫茶店へ連れ込まれる瑠奈だった。一方…和田教授は、封魔の宝玉から直接データをパソコンへ移す作業を行っていた。

「対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】…製造元、国連特殊兵器開発局。設計・開発責任者…！…アリナ・イノウエ！？」

和田玲子教授がパソコンのモニターを見て驚き、思わず立ち上がった。

「瑠奈の…母親だったの？亜里奈…。」

《井上亜里奈…彼女に封魔を任せるわけにはいかない。》

「また…。」

和田教授は画面上に再び現れた女性を、ジッと見つめた。

「貴女は…誰なの。」

《そんな事より、封魔の能力向上及び機能を説明します…。》

画面上の女性がそう和田教授へ告げると画面が切り替わり…封魔の
図面が現れた。

「封魔の可変機能？…太刀型可変形態【正宗】に薙刀型可変形態【
青龍】、大剣型可変形態【あまのむらくも天村雲】の…全3種へ変形が可能。」

教授は目を閉じて考えると…暫くして、ゆっくり瞳を開いた。

「これを知れば…国連やB A S T A R本部No. aの研究機関は、き
つと封魔のデータを欲しがらね。だけど…。」

キーボードに手を伸ばす教授。

「瑠奈の身に危険を及ぼしたくないわ…あの娘の身を守るには。」

和田教授が呟いていると…封魔の宝玉が淡い光りを放ち始めた。

「？…封魔…。」

『瑠奈は…私が守ります。』

「！…封魔！？」

喫茶店にいた瑠奈が慌てて立ち上がると、シグナルとリイナがキョ
トンとしながら瑠奈を見た。

「ど、どうしたの？急に。」

「美味しいですよ〜?」

「ごめん、封魔が…私を呼んでる。」

「え?」

「私を探してる…早く行かなきゃ!」

瑠奈が慌てて走っていくと、シグナルは立ち上がった彼女へ叫んだ。

「瑠奈! ちょっと、このケーキはっ!?!」

「あげるっ!」

「あ、あげるって…。」

「じゃあ、私が〜!」

瑠奈のケーキにフォークを伸ばすリイナ。

すると、シグナルも自分のフォークを瑠奈のケーキへ伸ばした。

「むっ!」

「んっ!」

二人がケーキを間に挟んで睨み合っているなか…瑠奈はエレベーターから飛び出るや、研究室に慌てて駆け込んだ。

「…教授っ！」

「瑠奈っ！…どうしたのっ？血相変えて！」

息を切らす瑠奈に、慌てて駆け寄る和田教授。

「ふ、封魔が…私を呼んでいる気がする。」

『瑠奈。』

「封魔！」

瑠奈はメンテナンス機器から取り出された封魔を手にとると、力一杯抱きしめた。

「封魔…教授によく診てもらった？」

『はい。いつでも戦闘可能です。』

「良かった…。」

瑠奈が封魔を見て、微笑んでいると…和田教授が白衣のポケットに手を入れて歩み寄った。

「封魔をちょっとだけ、バージョンアップさせてあるわ？」

「バージョンアップ？」

瑠奈が振り返って問いかけると、和田教授は苦笑いしながら頷いた。

「そっつ。まあ…正確に言うと、封魔が自分でバージョンアップし

「ただけど。」

「!…封魔が？」

「私も驚いているわ?…意思を持ち、使い手と共に成長する武器なんて。本当にNoaで開発されたのかしら?…明らかにオーバーテクノロジーよ。」

「封魔…。」

瑠奈は封魔を見つめ、黙り込むと…和田教授に頷いた。

「大丈夫です。私は封魔を…信じているから。」

「瑠奈…。」

和田教授は微笑むと、封魔の宝玉が光り輝いた。

『瑠奈?…真面目な会話をしているなか、恐縮なのですが。』

「何?…遠慮なんて、封魔らしくない。」

『…口に、クリームがついています。』

「えっ!?!…あ、これはその…慌ててたからよっ。」

赤面しながら口を拭く瑠奈を見て、和田教授は思わず笑みを溢した。

「ふふふっ!息もあってるし、心配ないかしらね?」

「え…はい、頑張ります。」

瑠奈は右手に握る封魔を見つめ…優しく微笑むと、そんな瑠奈の笑顔に心えるように封魔の宝玉は光り輝いていた。

冷めた心

その夜…。

真つ暗な東京上空を、BASTAR所属のヘリコプターがパトロールしていた。

日本政府は首都東京のみならず周辺都市へ、クリーチャーの襲撃から一般市民を守るという意味合いも兼ね…深夜の外出を老若男女問わず禁止する戒厳令を発令していた。

そんな無人と化した東京の空を、BASTARのヘリが飛んでいく。

「今日も異常無しか…。」

「暗くて良く分からん…もう少し高度を下げてくれ。」

「大丈夫か…?」

「この一帯はビル群しかない…住宅街じゃないから平気だ。」

「分かった。」

ヘリは旋回すると、高度を下げて街中へ向かった。

副操縦席の隊員が照明を操作し、真つ暗な車道や歩道を照らしていく。

街灯がところどころ点いてはいるもの…周囲のオフィスビルには

誰も残っておらず、人影は何処にも見当たらなかった。

「クリーチャーの姿はない…か。」

操縦席の隊員がそう呟いた瞬間だった。

道を照らしていた街灯が一斉に消え…へりの周囲が突然真っ暗になったのだ。

「なっ!?!」

「お、おいっ!ま、前だっ!」

副操縦席の隊員が正面にあるビルを見て、慌てて叫ぶ。

「だ、駄目だ!避けきれな…!」

「う…うわああっ!」

ビルに激突し、大爆発するB A S T A Rのへり。

燃えながら破片を撒き散らし落下するへりの遙か後方では…車道にあるマンホールの蓋が開き、そこからクリーチャーが赤い目を光らせていた。

翌日。

へりの墜落事故現場に、瑠奈達… 部隊の姿があった。

「あっちゃあ!ひでえ有り様だぜ。」

レオンがヘリの残骸を見ていると、リイナが鑑識班を集合させた。

「鑑識班はまず、墜落したヘリの調査をお願いします。」

「了解です。」

鑑識班の隊員達が墜落したヘリの周辺に、立ち入り禁止のテープを張っていく。

瑠奈はウインを連れ、現場を見て回っていた。

「墜落ツスか…いつ見ても嫌な風景ツスね。」

「そつね。」

「先輩。」

「リイナ、何か分かった？」

「管制室のレイチエル管制官から、ある情報が。ヘリがレーダーからロストした時間と全くの同時刻に、この地域一帯で原因不明の電圧上昇を確認したとの事です。」

「電圧上昇…？」

「はい。調べてみたところ…周囲にある信号機の端末や街灯の一部が、急激な電圧上昇により被害を受けていました。」

「よくシヨートとかで、火事にならなかったツスね？」

「私も…そこが引つかかっているの。」

ウィンとリイナがそう話すなか…瑠奈は辺りを見回した。

「どうやら…ただの墜落事故で済みそうにないわね？…封魔、周辺のエリアにクリチャーがないか、サーチしてくれる？」

『了解。周辺15km圏内をサーチします。』

「そこまで広くなくていいわ。索敵範囲は…そうね？10km圏内で。」

『了解しました。調査範囲を10kmに修正…サーチ開始。』

瑠奈は封魔を見て頷くと、腰に手を置いて周囲を見回した。

「周りはオフィスビルばかり。身を隠そうと思えば、簡単に出来るわけか…。」

『周囲5km、クリチャー反応無し。』

「もうこの辺りにはいないか…。」

「ん？…リイナさん、あれって地下鉄ツスか？」

「え？…ああつ、東京メトロ？東京都の地下を走ってる地下鉄なんだけど、今は朝から夕方までの運行になっちゃってるの。東京で働く人達の大事な交通手段だよ。」

「なるほど。下手にタクシー使うより安く済むツスからね？」

「そういう事っ！」

「…地下鉄…地下、か。」

『瑠奈。周囲10km圏内に、クリチャー反応はありません。』

「了解、封魔。ところで、封魔は地下までサーチ出来るかしら？」

『申し訳ありませんが、私の能力を以てしても地下をサーチする事は出来ません。それには更なるバージョンアップが必要です。』

「了解、ありがとうございます…リイナ！」

「はいっ！」

「鑑識班の警護は 部隊に任せる。私達は一旦、グラスハイムへ帰るわよ？」

「了解しました。」

リイナが敬礼すると…後ろからレオンが歩いてきた。

「瑠奈。」

「レオン？…何。」

「いやな？…車道にあるマンホールの蓋の一つによお？鋭利な爪が何かで引っ搔かれたような痕があんだ。」

「マンホール？」

「ああ、ついてきてくれ。」

レオンは瑠奈を車道の真ん中にあるマンホールの所へ連れていくと、その蓋を指差しながら振り向いた。

「これ、なんだけどな？」

瑠奈がしゃがんでマンホールを見てみると…確かに蓋の表面に引っ掻き傷がついていた。

「確かに変ね…。」

『瑠奈。そのマンホールの蓋から微弱のクリーチャー反応を感知。』

「！…という事は、地下からクリーチャーは姿を現れたのね。」

「だけどよ…クリーチャーがどうやってへりを墜落させたっつんだ？」

「それは分からないわ？だから一旦、グラスハイムへ帰るのよ。」

「帰ってどうすんだ？」

「クリーチャーが地下にいるのは分かった…あとは、奴等がどこに潜伏しているかを探らないといけないわ。」

「確かにこれ以上ここにいると、何の収穫も無さそうだしな…仕方ねえか！」

「分かったら、さっさと撤収準備なさい…グラスハイムまでジョギングしたい?」

「そ…それは、勘弁っ!」

リイナを助手席に乗せ、ウィンが車体に【B A S T A R】と書かれた四輪駆動車を運転して来ると…瑠奈とレオンは車の後部座席に乗って、事故現場を後にした。

瑠奈達が乗った四輪駆動車はグラスハイムの敷地内へ入ると、メインビルの駐車場へ車を停めた。

「だからよお…へりはなんで墜落したんだ?」

車を降りるなり、レオンは皆に問いかけた。

「まだ鑑識班が調査してるじゃない。」

「そっツスよ。」

瑠奈達は 部隊のオフィスへ入ると、リイナが照明をつけた。

「眩しッス!」

「眩しい…か。」

ウィンの言葉を聞き、瑠奈が考え始めるなか…レオンはリイナに問いかけた。

「俺は今、知りてえんだよ！」

「私だつて分からないの！ちょっと黙つてて！」

瑠奈は騒ぐレオンの後ろを通つてオフィスの角に行くと、そこにあつたブレーカー盤の扉を開けた。

「だからっ！…ん？」

「先輩？」

「…。」

バンツ！

瑠奈が目を閉じた状態でメイン・ブレーカーを切ると、オフィスの中が真つ暗になった。

「きゃっ！？」

「た、隊長！？いきなり何するんスカ！」

「瑠奈、お前何を…あでっ！」

レオンの叫び声が室内に響くと、瑠奈はブレーカーを入れてオフィスの照明を点灯させた。

「…分かつた？これが原因。」

瑠奈がレオンを指差すと…彼は涙目になりながら額を押さえて痛が

っていた。

その足元には、ボールペンが一本転がっている。

「な、何しやがんだっ！」

「…分からない？あのへりには、赤外線カメラが装備されてなかった。つまり…明かりの少ない街中を、あのへりはサーチライト一つだけで、警戒しながら飛行してたんじゃないかしら。」

「あっ、なるほど！」

「リイナは分かったようね？…そのペンはへりと見立てて、あんたに投げただけ。」

「俺はビルかよ…。」

「な…何がなんだか、さっぱりッス。」

「つまりっ！急激な電圧の上昇によって街灯の大半が破壊され、辺りの暗さに操縦者の目が慣れる前にビルへ自ら突っ込んでしまった…てわけですねっ。」

「そういう事。夜間飛行の際はへりにサーチライトを装備させると共に、操縦士は暗視ゴーグルを所持する事になっていた筈。それを忘れてちゃ、激突して当然よ。」

「なるほど…ん？…ちょ、ちょっと待てっ！？なら、さっき俺にペンを思いきり投げなくても説明出来たんじゃねえか？」

「あら…今更、気がついた？」

「か、可愛くねえ…ホント。」

「たははは。ですが…ヘリの墜落した原因が判明したとはいえ。」

「…地下に潜むクリーチャーを倒さないと、同じ事の繰り返しっスね。」

瑠奈は自分の席に着くと、机にあるパソコンの電源を入れた。

「もうそろそろか。」

「何がッス？」

「管制室からちょっと、ね。」

ピピッ！

「…きた。」

椅子に座ってパソコンを操作する瑠奈。

「先輩？何を…。」

「東京メトロの全地下鉄路線図を管制室のレイチェルから送ってもらったの…リイナ、今からそっちに転送するわ？」

「あ！…もしかして、クリーチャーが潜伏していそうな地域の特定と、次の行動パターン分析ですね？」

「リイナは理解力があってホントに助かるわ。頼むわね?」

「了解ですっ!」

「レオンとウインは出撃準備。」

「あいよっ!」

「了解ッス!」

リイナがパソコンと向かい合う。

「さあ…悪さをしたイケナイ子は、どこにいるのかなあ?」

リイナがキーボードを物凄い速度で操作していく。

「東京23区で地下鉄が密集する地域は結構ありますから、まずは範囲を絞らないと…。」

瑠奈はリイナの後ろに立ち、腕組みしながらモニターを見つめていた。

「どっ?」

「あとちょっと…。」

リイナがキーボードを操作していると…突然、彼女の手が止まった。

「…どうかした?」

「先輩、クリーチャーは電気を使うんですよね？東京都の何処かに…電力を極端に使用する、又はかつて大量に使用していた場所ってありますか？」

「ちよつと待つてね…。」

瑠奈が考えるなか…リイナは笑顔でパソコンのモニターを、彼女へ見せた。

「先輩…なら、この範囲内ではどうですか？」

リイナがパソコンのモニターに表示された、飯田橋から水道橋付近の地図を指差した。

「ん…それなら後樂園、かな。」

「コウラクエン？」

「ええ…ここよ。飯田橋と水道橋の中間ね…やや北寄りだけど。」

「その後樂園には、何があっただんですか？」

「【東京ドーム】というドーム球場があるわ？」

「！…そこですっ！その後樂園を中心に範囲を限定！」

瑠奈もリイナの肩に手を置いて、モニターを見つめる。

「へりが墜落したのは確か…。」

「あそこは御茶ノ水。その先の東京駅は昼間、大勢の人が行き来しているわ。」

「警戒してきつと奴等は行きませんね…ならっ！」

リイナがEnterキーを押すと、一本の路線が点滅した。

「出ましたっ！奴等は東京メトロ丸の内線を使用していると推測っ
！」

「次の襲撃予定は分かる？」

「ちよつと待つてくださいねっ？えつと…丸の内線を辿っていくと、重要施設があるのは……！」

瑠奈とリイナがモニターを見て、目を見開いた。

「！…一番可能性があるのは、そこみたいね。」

「はいつ。」

「よくやったわ、リイナ！さすがねっ！」

「いえいえ！じゃあ、ここからは…先輩達のお仕事です！」

「ええつ。」

瑠奈は微笑んでリイナの頭を撫でると…ハンガーに掛けていた衣を纏って、オフィスから出ていった。

「先輩！グラスハイムから、有線と無線でアシストします！」

「お願いっ！…レオン、ウィン！出撃するわよ！」

「待つてましたあっ！！」

「準備完了しているッス！」

「で…クリーチャーは次にどこ行くんだ？」

「霞ヶ関…国会議事堂よ。」

「！…日本の国家中枢を狙ってるんスか！？」

「うわっ！」

「な、何よ！？」

道行く人々が慌てて振り返るなか…日比谷通りを低空飛行で飛んでいく、一機のヘリがあった。

「メンテ、ぎりぎり間に合ってたぜ！」

「ウィン！」

「了解ッス！飛ばすッスよーっ！」

ヘリが猛スピードで皇居跡上空を通過していく。

「皇居跡…あとちょっとか。封魔、エネルギーを私の脚部に。」

『了解しました。封魔エネルギー、瑠奈の脚部に蓄積。』

「瑠奈！？何する気だ、おいっ！」

「ウィンツ！速度このまま！後部ハッチ、オープンッ！」

「へっ！？」

驚いて振り返ったウィンに、瑠奈が叫んだ。

「『へ？』じゃないっ！…出来る！？出来ないっ！？どっちっ！」

「りよ、了解ッス！」

瑠奈の怒声に圧倒され…ウィンが開閉スイッチを操作すると、ヘリの後部ハッチがゆっくり開いていった。

瑠奈はヘリの下を見て、車がないのを確かめると…レオンが苦笑いしながら問いかけた。

「ま、まさか瑠奈？お前…。」

「その…まさかよっ！」

「危ねえってっ！うおっ！」

レオンが慌てて手を伸ばすなか…瑠奈は猛スピードで飛行しているヘリから飛び降りると、土煙を上げながら踏ん張って勢いを殺した。

「に、人間技じゃねえな…。」

レオンが唾然としながら見つめるなか…瑠奈はゆっくり立ち上がった。

「ふう！さて、地下鉄は…。」

『前方にある日生劇場／＼帝国ホテルの地下に、丸の内線は走っています。』

封魔が宝玉を輝かせ説明すると、瑠奈は力強く頷いた。

「了解っ…ん？」

瑠奈が向かおうとした時、マンホールの蓋が開き…中からクリーチャーが次々に姿を現した。

「クリーチャー！…封魔っ！」

『了解。通常モードから戦闘モードへ移行します。』

瑠奈は飛び掛かってきたクリーチャーの顔面を殴ると、廻し蹴りで蹴り飛ばした。

「はぁあっ…！」

抜刀斬りで1体を両断し、後ろから迫って来た1体を斬り下ろして真っ二つにする。

「ぞろぞろとっ！」

クリーチャーが爪を光らせて斬りかかってくるも、瑠奈は鞘で弾いてクリーチャーの首を切り落とした。

「瑠奈。丸の内線の線路に沿って、およそ百体のクリーチャー反応を確認。」

「ひゃ、百体っ!?!?…きゃあっ!」

瑠奈はクリーチャーの蹴りを背中に食らって体勢を崩されるも、手を地面につき…横転して振り返った。

「こんな奴等に、苦勞してる場合じゃない!」

瑠奈は再び斬りかかると…クリーチャーの爪をしゃがんでかわし、胴体を両断した。

「邪魔っ!」

瑠奈が物凄い勢いで倒していくと、クリーチャーが突然後退し始めた。

「!…逃げる?」

瑠奈が封魔を構えながら辺りを見渡していると…地面から突然クリーチャーらしき手が現れ、彼女の足を掴んだ。

「何っ…!!…うああっ!!!」

瑠奈は、足を掴む手から放たれた電撃をまともに食らうと…身体中から煙を上げて、四つん這いになった。

「くっ…に、逃がすわけにはいかないっ！」

瑠奈がふらつきながら何とか立ち上がると、足を掴んでいる手が帯電を始めた。

「…!!…うああっ!!」

瑠奈の身体を電撃が走る。

「うああああっ!!…ぐっ!!こんのお!!」

瑠奈は封魔を持ち換えて、アスファルトに突き刺すと…地面から出ていた手が地中へ逃げた。

「はあ!はあ!はあ!」

片膝について息を切らす瑠奈の前に、地面からクリーチャーが姿を現した。

両肩と額に角を生やしたクリーチャーは、瑠奈を見るや…片手に帯電し始めた。

「くっ…。」

「グアアアアア!」

クリーチャーが電撃を放つと、その電撃は一直線に瑠奈へ向かって

いった。

「…ふ、ふふふ。」

電撃が迫るなか…ニヤリツと微笑む瑠奈。

「待っていたのよ…お前が、地下から出てくるのをねえ！」

瑠奈は横へ飛び退き、紙一重で電撃をかわすと…封魔を握って、クリチャー目掛けて走りだした。

「はぁあっ！」

瑠奈が封魔で斬りかかると、クリチャーは両腕をクロスして身を防いだ。

キイン！

「…刃が通らないっ!？」

封魔を弾かれ…瑠奈が驚いていると、クリチャーの足元にヒビが入った。

「…道路がつ！」

地面が陥没すると、瑠奈はクリチャーと共に地下鉄の路線へ落下した。

「くっ…。」

瑠奈がゆっくり立ち上がると…暗闇の中から走ってきたクリーチャーが、彼女にラリアットをお見舞いしてそのまま壁に叩きつけた。

「うあっ！…ああっ！！」

顔を掴まれ、地面に叩きつけられる瑠奈。

ミシミシミシ…

クリーチャーが手に力を入れるにつれ…瑠奈の頭蓋骨から軋む音が響く。

「ああっ！！」

瑠奈はクリーチャーの腕を掴んで必死に外そうとするも、その人並み外れた握力の前に歯が立たない。

「ああっ！…うつく！」

瑠奈は封魔を手探りで探すと…右手に封魔の柄が当たった。

「見つけた！…だあっ！」

封魔が胸に突き刺さり、絶叫するクリーチャー！。

「たあっ！」

瑠奈が胸に突き刺さっている封魔の柄を思いっきり蹴ると…刃が背中まで貫通した。

「グアアアアッ!!」

「うう…。」

額を掴み、頭を左右に振る瑠奈。

「やってくれるじゃない…たまには手応えのある奴と戦いたかったし、ちよつど良いわ。」

瑠奈は胸に突き刺さっている封魔を一気に引き抜くと、後ろに飛び退いた。

「さあ…続けましょっつ!」

瑠奈が刃についた血を払って封魔を構えると…クリーチャーも帯電しながら、ゆっくり立ち上がった。

「たまたま電気を使えるようになったからって…凶に乗るなっ!」

「ガアッ!」

「あら…凶星で怒った?」

瑠奈がニヤリツと笑って封魔を横に構えると、クリーチャーが次々と電撃を放った。

「ふっ!」

瑠奈は電撃をかわしながら、クリーチャーの様子を伺っていた。

《先輩！リイナですっ！》

「リイナ、どうかした？」

《先程、霞ヶ関の各省庁付近にクリーチャーが出現！現着したレオンとウィン及び…シグナル隊長率いる 隊が交戦に入りましたっ！》

「！…始まった!？」

瑠奈は電撃を避けながら、イヤホンマイクを掴んで驚いた。

《先輩、今どちらに!？》

「私っ!？私は昨夜のへりを落としたクリーチャーと、痺れるデートの真っ最中っ!」

電撃をかわしながら、柱の影に隠れる瑠奈。

《だ、大丈夫ですかっ!？》

「ビリビリ、凄いわよ？」

《ぷっ…あははっ!》

「?…何？」

突然笑い始めたリイナに、瑠奈が首を傾げながら問いかけた。

《先輩も…たまには冗談を言っんですねっ。》

「冗談も言いたくなるわっ！…くっ！」

クリーチャーが封魔を弾いた豪腕で柱を殴ると、ミシミシと音をたてて倒れ始めた。

瑠奈は飛び退いて難を逃れるも…クリーチャーが追いかけてくるなり、彼女へ殴りかかった。

「ちっ！」

瑠奈は左足を後ろに引いて半身反らすと…拳をかわして、そのままクリーチャーに肉薄した。

「もらいつ！」

瑠奈は笑顔で呟き、封魔を勢いよく振るうと…クリーチャーの首が、地面にゆっくり落ちた。

「ふう…さて、私も急がないと。」

瑠奈が刃の血を払った封魔を鞘に戻すと、頭上を見上げた。

「地上には戻れない…このまま地下鉄の線路を歩いていくしかないわね。」

瑠奈は線路を歩いていくと…暫くして、背後から不気味な音が聞こえてきた。

「何？…緊急時、関東一円の路線は運行を中止する事になっている

等。」

瑠奈が無言のまま後ろを見つめていると…大きな影が線路の上を走って来た。

「…えっ!？」

瑠奈が絶句したのも無理はない…。

彼女の目の前に巨大な芋虫型クリーチャーがうねりながら走って来たのだ。

「じょ…冗談じゃないわっ!」

瑠奈は慌てて走りだすも、芋虫クリーチャーとの距離がみるみる縮まっていく。

「こっとなつたら!」

瑠奈は振り返って芋虫型クリーチャーの鼻先に封魔を突き刺すと…クリーチャーの頭部を蹴って、その身体の上に乗った。

「うわ…足場最悪。」

「。ピギイイッ!」

「ん?…きゃあ!」

芋虫クリーチャーは地上へ飛び出ると、目の前に国会議事堂が見えてきた。

「速いつ！このままだと国会議事堂まですぐに……んっ！」

瑠奈は背後から飛んできた電撃を飛び越え、振り返ると…先程倒した筈の電撃を使うクリーチャーが、頭部を脇に抱えた姿で立っていた。

「まだ生きていたの…フラれたのがショックだったのかしら？」

瑠奈は封魔を身構え、踏ん張ろうとするも…弾力性のある芋虫クリーチャーの身体にめり込んだ。

「くっ…足場は悪いし、時間もない…どうするっ。」

瑠奈が考え込むと…封魔の宝玉がゆっくり光りを放ち始めた。

『…瑠奈。』

「！…封魔？さっきから喋らないし、壊れたかと思ったわ？」

『あの程度の電撃ではビクともしません。』

「言っじゃないっ！封魔、フルパワーで各個撃破するわ…いいわね？」

『瑠奈、現状を考えると…第一可変形態【正宗】の使用を推奨します。』

「…正宗？」

『はい、私の能力の一つです。刀身が長くて太い太刀の姿に、形状を変化させます。』

「面白いじゃない…。」

瑠奈は封魔を横に払い、叫んだ。

「封魔っ！正宗、起動！」

『了解しました。【正宗】、起動します。』

封魔の宝玉に【正宗】と文字が表れると…刃が粒子レベルに分解され、太く長い刃に再構成されていく。

瑠奈は柄を伸ばし、勢いよく封魔を振りかぶると…刃の再構築が完了し、通常の封魔と比べて倍の長さになった。

『瑠奈、流華一閃のエネルギーチャージを始めます。』

「流華…一閃。」

『刃に蓄積したエネルギーを放ち、その真空波で敵を消し飛ばします。』

「分かった…封魔、お願いっ！」

『了解、エネルギーチャージ…スタート。』

瑠奈が振りかぶっている封魔の刃に赤いエネルギーが蓄積すると…刃がどんどん赤く染まっていった。

そんな瑠奈を睨みながら、クリーチャーも右手に電気を帯電し始めた。

「…封魔。」

『流華一閃…スタンバイ。』

「了解っ！はああ！」

「グアアアアア！」

クリーチャーが、凄まじい電撃を瑠奈目掛けて放つ。

『今ですっ！』

「はああっ！流華…一閃っ！！」

瑠奈が封魔を振るうと…赤い真空波が巨大な電撃を消し飛ばしながら、クリーチャーに迫っていった。

「ギアアアア！」

クリーチャーは赤い真空波をまともに浴びると、跡形もなく吹き飛んだ。

「流華・一閃…凄い威力ね。せせらぎを流れる華のごとく…美しく、そして儚い赤い刃…うん！素敵じゃない。」

瑠奈が微笑みながら言うと、封魔の宝玉が光り輝いた。

『瑠奈、まだ終わっていませんよ?』

「あ…そうね。この気味悪い芋虫クリーチャーも。」

瑠奈は封魔を頭上へ振り上げると、その刃に再びエネルギーが集まってきた。

「…黙らせなきゃいけないわねっ!」

瑠奈は勢い良く封魔を芋虫クリーチャーの背に突き刺すと、体の至るところから赤い光が放たれた。

「吹き飛ばえーっ!」

「ん?…うああ!」

国会議事堂の門番をしていた警察官が接近する芋虫クリーチャーを見て、慌てて逃げると…クリーチャーは全身から赤い光を放って、大爆発した。

「うわあ!」

警察官が腰を抜かして尻餅をついていると…飛散した芋虫クリーチャーの肉片がボロボロと落ちてくるなかを、瑠奈が封魔を鞘に戻しながら歩いてきた。

「今夜の夢見は…悪そうね。」

《先輩っ!》

「ん？」

瑠奈が空を見上げると…B A S T A Rのヘリが降下してきた。

「リイナ？」

瑠奈が目を凝らして呟くと…ヘリの後部ハッチが開いて、リイナが顔を出した。

「先輩っ！ 隊のヘリを拝借しました！早く霞ヶ関につ！」

「ありがとう！」

瑠奈はリイナの伸ばした手を掴むと…ヘリの後部ハッチに飛び乗って、霞ヶ関へ急行した。

その霞ヶ関では既に戦闘は終わり、至るところから煙が上がっていた。

「…かぁあっ！！疲れたなあ！おいつ！」

「ほ、本当ッスね…。」

レオンとウィンが薬莢の散らばっている道路に寝っ転がって休んでいた。

「お疲れさまっ。」

「シグナル隊長。」

シグナルが笑顔で歩み寄ると、レオンは起き上がって会釈をした。

「何だかんだ文句言いながらも、流石は 隊ねっ！撃破数が最多よ？瑠奈も鼻が高いんじゃない？」

「どうだかねえ？あの隊長さんの性格上…。」

レオンが瑠奈の愚痴をこぼそうとした瞬間…背後から誰かに頭を掴まれた。

「…その程度、出来て当たり前よ。シグナル、調子乗らせないで。」

「瑠奈っ！」

シグナルは瑠奈の姿を見て、安堵の表情を浮かべた。

「なっ、シグナル隊長。ウチの隊長さんはよお、部下を褒めるって事を知らねえんだっ。」

「そうツス、そうツス！うししっ！」

「みたいね？…ふふっ、あはは！」

「？…何が可笑しいの？」

瑠奈が首を傾げるなか、シグナルやレオン達は大笑いしていた。

こうして、日本の国家中枢を攻撃するというクリーチャー達の企みを何とか未然に防いだ瑠奈達…B A S T A R だった。

その頃…。

日本から、遙か北に位置するグリーンランド。

その国の真ん中にある山岳地帯に巨大な洞穴があった。

「…手強い。」

「確かB A S T A Rとか言ったか？…やるではないか、あの計画を見抜くとは。」

「たかが人間、臆する事なんかないよおっ。」

「ひとまずは、静観していよう。」

「まだ…動かないんだね？」

「そうだ。」

暗闇から四人の声が聞こえたかと思うと…暫くして、再び洞穴に静寂が戻った。

その頃…。

グラスハイムに帰還した瑠奈は、シャワーを浴びた後… 部隊のオフィスで、封魔の手入れをしていた。

「瑠奈、いるかあ？」

オフィスにレオンが入ってきた。

「いたいた！…瑠奈、一緒に飯…」

「却下。」

「瑠奈、…」

「拒否。」

「瑠奈…」

「嫌。」

「瑠…」

「無理。」

「す、全ての拒否言葉が使われた…（汗）」

「早く行きなさい。」

「へえへえ！シヨックで笑う事も忘れたってか？寂しいなあ、おい！」

レオンが笑いながらそう言うと…瑠奈が突然、机を叩いた。

「あんたに…あんななんかに、私の何が分かるっていうの！？」

「る、瑠奈？」

啞然とするレオンを睨み、出入口を指差す瑠奈。

「出ていきなさいっ！今すぐにつ！」

「ちよっ…わ、悪い。言い過ぎた。」

「いいから…出てけっ！！」

「わ、分かった…。」

レオンがオフィスから出ていくと…瑠奈は封魔を抱きしめ、椅子の上で膝を抱えると静かに俯いた。

「私の事なんか気にしないでよ…一人がいいの、私は。」

俯く瑠奈の頬を流れる涙。

「一人なら…大切な人を無くさなくて済むから。」

『…瑠奈。』

「あ。」

封魔の呼びかけに慌てて涙を拭く瑠奈。

「ごめん…何？」

『瑠奈、息抜きしませんか？』

「い、息抜き？」

瑠奈はキョトンとしながら、封魔の宝玉に問いかけた。

『そう、息抜きです。一度…寮へ帰りましょう。』

「わ、分かったわ。」

瑠奈は封魔の指示通り…一旦、寮に帰ると普段着に着替えた。

Tシャツの上にジャケットを着て、下はデニムのミニスカートという服装で瑠奈は女子寮を出た。

「わ、私…似合わないよ。」

『たまにはリフレッシュするのも大事ですよ？』

「リフレッシュって…何をしたら。」

瑠奈は仕方なく、ヘリポートの方に向かうと…ヘリを整備しているウインの姿があった

「ん？…た、隊長ツスカ!？」

髪をなびかせながら私服で歩いてくる瑠奈を見て…ウインは真っ赤になって、硬直していた。

「あ…ウイン。」

「は、はいっ！なんツスカ!？」

瑠奈はスカートをつまみ、ウィンに問いかけた。

「私の服装…可笑しくない？」

「い、いえっ！めっちゃくちゃ可愛いッスー！」

赤面しながら笑顔で敬礼するウィン。

「そ、そんなに動揺しなくても…や、やっぱり…私が女の子らしい服装でいるのは変よね…。」

俯き…悲しそうな表情を浮かべた瑠奈を見て、ウインは慌てて両手を振った。

「と、とんでもないッスー！！本当、可愛いッスよ！」

「あ、ありがとう。」

瑠奈は照れながらウィンに微笑むと、メインビルへ向かった。

「やた…：…いやったあ！！隊長が俺にだけ微笑んでくれたッス…：…ああ、もう一生お供するッス！」

ウインが笑顔で泣きながら、空を見上げ拜んでいる頃…瑠奈は研究室の和田教授を訪ねた。

「わ、和田教授…いますか？」

「今の声は瑠…あらあ！普段着なんて珍しいわねえ？」

私服の瑠奈を見て、笑顔で駆け寄る和田教授。

「た、たまには服装を変えて息抜きを…って封魔が。」

赤面して俯く瑠奈に、和田教授は優しく微笑んだ。

「そうっ！確かに息抜きは大切よ？今日は私服姿を見せに来てくれたのね。」

「あ、ち…違います。封魔のメンテナンスをお願いしたくて…あの、初めて使ったから…正宗を。」

赤面しながら動揺する瑠奈を見て、和田教授は思わず笑みを溢した。

「ふふふ！分かったわ、少し待ってなさい？」

「は、はい。」

瑠奈がスカートを引っ張りながら恥ずかしそうにソファに座っているのを見て、和田教授はまるで母親のような優しい笑顔で彼女を見つめた。

「封魔、上手いわね？彼女の冷えきった心を温めるのが。」

『ずっと長い間、近くにおりますから。』

「そうね。」

和田教授が封魔の宝玉に微笑むと、研究室へシグナルがやって来た。

「失礼します！玲子教授、前回の戦闘で…えっ!？」

「シグナル…。」

シグナルはソファアに座っている瑠奈の姿を見て、硬直した。

「瑠奈あ!？」

シグナルは笑顔で駆け寄ると、瑠奈の両手を掴んだ。

「可愛いよお！瑠奈っ!！」

「あ、ありが…とっ。」

「シグナル？瑠奈が恥ずかしがってるわよっ。私に用があるんじゃないかって？」

和田教授が歩いてくると、シグナルは苦笑いしながら振り返った。

「ご、ごめんなさい…玲子教授。ちょっと、ウチの隊で使用しているプロテクターについて…。」

(皆…私がこういう姿でいるのって、変に思わないのかな?)

瑠奈は立つと、二人に歩み寄った。

「瑠奈っ、どうしたの?？」

「シグナル、和田教授…あ、あの。」

「ん？」

「なあに？」

「わ、私…皆と会ってからこんな恰好したの初めてだから…その、
こんなの似合わない…よね？」

瑠奈が俯きながら問いかけると、二人は顔を見合って笑みを浮かべた。

「瑠奈、平気だよ！」

「ふふっ、他人が自分の事をどう見てるのか気になったのね？」

瑠奈が頷くと…和田教授は、笑顔で彼女に歩み寄って顔を覗いた。

「大丈夫よ、ホントに可愛いわ。それに…貴女が意識している程、
他人は貴女に関心を持ってないわよ？きっと。」

「そうそう。私や教授は瑠奈を知ってるから、意識して見てるけど
っ。他人の目なんて気にしない、気にしない！」

「シグナル…教授…うん。」

瑠奈は笑顔で諭してくれた二人を見て…笑顔で頷いた。

自室に帰った瑠奈は、夕暮れ時の東京をジッと見つめていた。

『瑠奈、どうでした？』

「封魔。」

封魔の宝玉が淡く点滅しながら、瑠奈に話しかけた。

『たまには私服を着て、一人の女の子に戻るのも悪くないでしょう？』

「…たまになら、ね？」

瑠奈は微笑みながら、東京を眺めた。

『レオンのように、日々…息を抜かれていては困りますが。』

「ん？…確かに。ふふ、はははっ！」

『瑠奈？…今、変な事言いましたか？私。』

「ははは！…うん、言った言った！」

『どの辺りが誤っていたのか、教えていただけますか？修正します。』

「駄目よ！教えてあげないっ！」

『もう！意地悪ですね〜？』

「ふふふっ！…あ。」

瑠奈は気がついた…。

封魔と一緒にいる時だけ…自分が笑顔になっている事に。

「私…笑えるんだ。」

『瑠奈?』

「ん?何でもないわ。」

ピンポン!

「ん?...誰かしら。」

瑠奈は室内に入ると、壁に付いているインターホン受話器を手にとった。

「はい。」

《先輩!リイナですけど、夕御飯まだなら一緒に行きませんか?》

「リイナ...。」

『瑠奈、私の事は気になさらずに。部屋で待機していますから。』

「封魔…じゃあ、行ってきます。」

瑠奈は微笑みながら封魔にそう呟くと、私服のまま自室を出ていった。

翌日...。

B A S T A R の制服を着た瑠奈が封魔を腰に差し、いつもの着物を羽織ってオフィスにやって来ると…レオンが土下座して待っていた。

「…。」

「おはようございます！井上瑠奈様っ！」

「…金なら貸さないわよ？」

「ギクツッ！…うげっ！？」

瑠奈が、わざとレオンの背中を踏みつけて歩いていくのを見て…ウインとリイナがクスクス笑う。

「自分の意思でパチンコをやってきたんでしょう？スったお金は自分で何とかなさい。」

「隊長！そこを何とかしてくれよ！なっ！頼むっ！」

拝むレオンに振り向くと…瑠奈は笑顔で言った。

「イ・ヤ！」

「そんなぁ！…がつくし！」

消沈状態のまま自分の席に座り、卓上で顔をうつ伏せるレオンを見て、やれやれ…と苦笑いする瑠奈。

「じゃあ、俺はへりのメンテしてくるッスー！」

「よろこぶ！」

リイナが笑顔でハンカチをヒラヒラ振り、ウィンを見送る。

「平和ね？今日は……。」

瑠奈は窓のブラインドを開けると、陽射しを全身で浴びながら笑顔で空を見つめていた。

クリーチャーの猛威

霞ヶ関襲撃事件以降、平和な日々が続いていた。

季節も初夏から秋へと移り変わり…気持ちの良い朝を迎えていた。

ジリリリ…

寮の一室で目覚まし時計が鳴り響く。

「ん…こんな早くに…目覚ましセットしたかな？」

瑠奈は目覚まし時計のベルを止めると、目を擦りながら起き上がった。

『おはようございます、瑠奈。』

「おはよ、封魔。」

ベッド脇に立て掛けてあった封魔の宝玉が、淡く点滅していた。

『本日は10:00時に隊長会議があります。お忘れにならないよう。』

「そういえば…今日だったわ。ありがとう、封魔。」

瑠奈は下着の上にYシャツを着たラフな恰好で冷蔵庫に行くと、オレンジジュースを取り出した。

『瑠奈は好きですね？オレンジジュース。』

「うん、昔から好きなの。ちょっと、シャワー浴びてくる。」

『了解しました。』

瑠奈がシャワーを浴びている頃……。

世間も、普段の平和な朝を迎えていた。

大勢のサラリーマンやOLが街中を歩いていく。

世界がどうなっているにしても、自分達には関係無い……。

ただ、自衛隊やBASTARが戦うだけで……自分達は痛くも痒くもない。

彼等の表情からは……そんな心境が読み取れた。

しかし……この日の朝は、普段の朝とは違った。

「キヤー！」

「ん？……！？」

女性の悲鳴を聞き、サラリーマンが振り返ると……巨大な鳥が彼の頭を鷲掴みして、大空へ飛び去っていった。

「な、なんだ！？今のは……。」

啞然とする、他のサラリーマン達…。

ぎゃあああつ！

「ひっ！？」

「こ、今度は…なんだ…！」

グチャツ

絶叫を聞き、動揺するサラリーマンの目の前に落ちてきた物…。

それは…先程巨大な鳥に連れ去られた男の生首だった。

「う、うわあああつ…！」

サラリーマン達が叫ぶと同時に、再び襲いかかる巨大な鳥…。

オフィスビルが立ち並ぶ街中に、悲鳴と叫び声が響き渡った。

「…ふう。」

『目、覚めましたか？』

「まあ、ね。」

シャワーから出た瑠奈がテレビを点けて、再び冷蔵庫に向かう。

「シャワー浴びた後は、やっぱり牛乳よね？」

《臨時ニュースをお送りします！先程：目黒駅周辺で、巨大な鳥が目撃されました！》

コップに牛乳を注いでいた瑠奈の手が止まる。

「よっ…。」

テーブルの上にあるテレビのリモコンに足を伸ばして、音量を上げる瑠奈。

『瑠奈？』

「静かに。」

瑠奈はお尻で冷蔵庫を閉め、牛乳を飲みながらテレビの前に立った。

《現在までに集めた情報によると…空から突然男性の首が落ちてきたという証言もあり、警察は殺人事件と猟奇殺人の両方を視野に…》

「猟奇殺人なんかじゃない…。」

『瑠奈、それは恐らく…。』

「ええ…十中八九、クリーチャーでしょうね。ちょっと調べてみましょう…隊長会議を抜ける、良い口実が出来たわ。」

『瑠奈、それは…。』

「封魔、着替えるから見ないでね。」

瑠奈は封魔にバスタオルを被せると、制服を着始めた。

そして、瑠奈は司令官のバランスに許可を取り…隊長会議をパスして、先程見たニュースの現場へと向かった。

事件現場に、猛スピードで走ってくる一台の四駆車。

その車体には、【B A S T A R】と記されていた。

キキッ！

「よし、着いたぜ？」

「いたた…もうっ！危ないなあ！」

「俺も2〜3回頭を打ったツスよ!？」

「レオン、もう少し考えて運転なさい。」

「へえへえ！」

瑠奈がB A S T A Rの四駆車から下りると、リイナやウィンもふて腐りながら下りてきた。

「ここですかあ？」

リイナが手を額に当て、日光を遮りながら上を見る。

「ビルの壁面には、血は付着してませんね。」

「殺した後に生身の男性を屋上から突き落としたんなら、窓ガラスや縁…壁面とかに少しくらい血痕が飛んでる筈だぜ？」

「でも、壁を見ても血痕なんて見当たらないツスよ？」

「血は出てないわね、恐らく。」

「えっ？」

リイナ達が振り向くと…瑠奈は巨大な羽を拾い上げた。

「な、なんツスかぁ！？それ！」

「見て分からない？…羽根よ。」

「そ、そういう意味じゃねえ…！」

レオンとウィンが驚いていると…リイナが瑠奈に歩み寄って、その大きな羽根を受け取った。

「うわぁ！大きい羽根ですね。」

「ええ…けど普通の鳥だったら、こんな事件を起こさないわ。」

「えっ？…じゃあ。」

「恐らく、クリーチャーの仕業よ…。」

考え込む瑠奈とリイナの元に、レオンが歩み寄った。

「だがよ？…鳥型のクリーチャーなんて聞いた事ねえぞ？」

「確かにそうツスね？人型以外のクリーチャーなんて初耳ツス。」

「霞ヶ関防衛戦の際、大きな芋虫のクリーチャーがいたわね。」

「先輩、青ざめてますよ？」

「はあ…。」

「先輩？」

「その芋虫型クリーチャーにトドメを刺したら、肉片が周囲に飛び散ったのを思い出しちゃってね。」

溜め息をつく瑠奈を見て、苦笑いするリイナ。

「と、とにかく…この羽根はグラスハイムに持って帰ります。クリーチャー化した生物が分ければ、今後…対応もしやすいですし。」

「ええ、お願いね？リイナ。」

「はいっ！」

「じゃあ…現場調査は終わりにして帰つか？」

「ええ。証拠品はあらかじめ警察が持ってっちゃっただろうし…これ以上は何も出ないでしょう。」

「よし！じゃあ、さっさと帰ろうぜっ！」

「そうツスね！」

「…ん？」

「先輩？」

「あれは…何かしら。」

瑠奈が目を凝らして見てみると…建物の合間から、何か細長い物が出ていた。

「…。」

瑠奈が気配を殺しながら歩いていくと…ビルの合間から生々しい音が聞こえてきた。

クチャ…クチャクチャ…

「…封魔。」

『了解。』

鞘に手を当てて柄を掴みながら近づいていくと…瑠奈はビルの合間を覗き込んだ。

「！…なっ！？」

瑠奈が目を見開いて驚くと、レオンが走ってきた。

「瑠奈っ、どうし…」

「！…馬鹿っ！」

レオンが履いているブーツの足音に気付き…無数の大きな影がゆっくり振り向いた。

「！…まずいつ！」

瑠奈は後ろへ飛び退いて封魔を抜くと、直ぐ様身構えた。

すると…ビルの合間から、通常より一回り大きいカラスが群れで飛び出てきた。

「きゃああ！」

「！…リイナ！」

リイナに駆け寄り、封魔でカラスを斬り倒す瑠奈。

「瑠奈！？たかが鳥…じゃねえな！」

「カラスにしては、でかすぎるツス！」

「用心なさい！クリーチャーよ、こいつらはっ！」

「まじツスカ！？」

「本当よ！こいつら、ビルの影で人の足を食べていたわ！」

「うえっ！」

「今のうちに叩いて、数を減らしておくわよ！」

「了解っ！」

レオンが腰から拳銃を抜いて、構えた。

「ウインは交戦しながらリイナを車へっ！」

「了解ッスー！さあ、リイナさん…行くッスー！」

「待つて！…先輩！」

「リイナ？」

瑠奈が振り向くと、リイナが心配そうな表情で叫んだ。

「このカラス達が万が一、雛だったら…親鳥が近くにいるかもしれないっ！気をつけて下さい！」

「了解、用心するわ。」

リイナは瑠奈に頷くと…ウインと共にB A S T A Rの四駆車に向かった。

「くそったれ！」

レオンが拳銃でカラスのクリーチャーを撃つも、クリーチャーは軽々と避けていった。

「チキシヨー！速えなっ！」

空になったマガジンを捨ててリロードするレオンの背後に、1匹のクリーチャーが迫っていた。

「！…レオンッ！」

瑠奈が気付き、走り出した。

「んっ？」

「後ろっ、避けなさいっ！」

「後ろ！？…ぐうっ！！！」

レオンは咄嗟にうつ伏せになるも、クリーチャーの爪が彼の背中を引き裂いた。

「レオンッ！」

カラスのクリーチャーを倒しながら、レオンに駆け寄り寄る瑠奈。

「しっかりしてっ！」

「だ、大丈夫だって…。」

レオンは強がって笑顔で言うも、戦闘服は血で赤く染まっていた。

瑠奈は咄嗟に腰の無線機を手に取ると、四駆車へ振り返った。

「レオンが負傷したっ！ウイン、車まわせる？撤退するわ！」

《了解ッス！》

「瑠奈…。」

「…何？」

「す、すまねえ…な。」

素直に謝罪してきたレオンを、ジッと見つめる瑠奈。

「無理しないの、馬鹿。」

タイヤを軋ませながら四駆車が走ってくると、瑠奈はレオンを後部座席へ乗せてドアを閉めた。

「ウイン、早く！撤退よ！」

「了解ッス！」

瑠奈は四駆車の後ろにある脚立にしがみつくと、ウインが車を急発進させた。

「レオン…大丈夫？」

リイナは車に積んでいた救急箱を開けると、レオンの衣服を脱がして止血を始めた。

「けっ！こ、この程度で死にやしねえよ。」

「そっか…あ、先輩。グラスハイムに帰ったら、例の羽根を和田教授と一緒に調査しても良いでしょうか？」

「ええ、お願い。その馬鹿は、寝かせとけば直に治るでしょ。」

「…俺の扱い、冷た。」

「自信過剰なのよ…もう少し自分をいたわりなさい。」

「…瑠奈もな。」

「ふん…。」

「仲が良いんだか悪いんだかつ。」

「しっしっ…！」

目は合わせないものの…瑠奈とレオンは、優しく微笑んでいた。

瑠奈達の乗った車がグラスハイムに帰って来ると…敷地内から黒いセダンが出ていった。

「ん？なんスかね？」

「お偉いさんみたいだねえ？誰だろ。」

「…。」

後部座席に乗っていた瑠奈がチラッと黒いセダンを見ると…窓の開

け放たれたセダンの後部座席にいた若い男と目が合った。

その男は瑠奈と目が合うなり…ニヤリツと不気味に笑った。

「井上…瑠奈、か。」

「…気持ち悪。」

両車がすれ違つと…瑠奈は黒いセダンを睨みながら呟いた。

「奴は確か…警視庁特別犯罪調査班の矢崎誠だったかしら。」

「えっ?」

「隊長、知り合いつスか?」

「知り合いつて訳じゃないわ?…気持ち悪い笑顔振り撒くから、誰かさんみたく気に入らないだけ。」

「ホント先輩は、ズバツと言いますねえ?」

「ホントホントツ!」

「…その性格のせいで泣いてるのが1名いますけど。」

「嫌ね…幽霊じゃない?」

「社内いじめだよな…これ。」

駐車場に四駆車を止めた後…ウインの肩を借りて、レオンは車を降

りた。

「レオンはん、大丈夫かいな!？」

「…レイチエル。」

金髪のアメリカ人が京都弁で叫びながら、担架を押す一般隊員らと走ってきた。

「レイチエル・ランサム管制官、ウインと一緒にレオンを救護室へ。」

「了解つ。ウインはんもどこか痛めたん？」

「いえ、俺はただの付き添いツスよつ。」

「そか!…あ、井上隊長。」

レイチエルが呼ぶと、四駆車から封魔を取り出していた瑠奈が振り向いた。

「…何？」

「さつき、警視庁のお偉いさんが来て…今回の事件は自分達で捜査するから、BASTARは通常監視に戻れって言っていましたわ。」

「はあ〜!?!何それ!！」

「…矢崎ね。」

「どうします、先輩？」

「聞くだけ野暮よ…続けるに決まってるわ。」

「了解ですっ！」

「ウインは、その馬鹿に付き添ってやって。」

「了解ッス！」

「瑠奈？お前はどうすんだ。」

「私は、リイナと研究室へ向かうわ。」

瑠奈はリイナと一緒にメインビルへ入ると、地下の研究室へ向かった。

「和田教授〜！」

「あら、リイナ。珍しいわね、何か用？」

「ふふふっ、一緒に楽しめそうな仕事を持ってきましたあ！」

リイナが例の羽根を見せると、和田教授は驚きながらその羽根を手にとった。

「凄い大きな羽根ね？」

「はいっ！朝の事件現場に落ちてました！これを…ぶっ！」

「調べてもらえませんか？」

長々と話していたリイナの頭を掴んで、瑠奈は代わりに羽根の解析を依頼した。

「なるほど…分かったわ、やってみましょう。」

「リイナを助手に使って下さい。多忙のところ、すみません。」

「構わないわ？私はいつも暇だしね。面倒臭い事は、さっさと終わらせるタイプなの。」

「なら…今日中に何とか出来ますか？」

「？…珍しく急がせるわね。何かあったの？」

「警視庁が動き出しました。私達の行動が制限される前に、何とかしないと。」

瑠奈がそう言うと…和田教授は険しい表情で頷いた。

「確かにさっき、警視庁の矢崎が来てたわね…なるほど、瑠奈達の妨害をしに来た訳か。」

和田教授がそう言うと…瑠奈は静かに頷いた。

「頼めますか？玲子教授。」

「警視庁の鑑識や科捜研の奴等と競争か…面白いわね。腕が鳴るじ

やないっ!」

「私も頑張りますっ!」

リイナに優しく微笑む瑠奈。

「リイナ、お願いね? 私はウィンと一緒に、出撃準備をしておくから。」

「はいっ! 任せて下さいっ!」

瑠奈はリイナに微笑みながら頷くと、研究室から去っていった。

「先輩…。」

「さあて、瑠奈の期待に応える為にも…頑張りますかっ!」

「はいっ!」

微笑む和田教授に振り向き、リイナは力強く返事した。

「…瑠奈!」

「シグナル。」

一階のロビーを歩いていた瑠奈に、シグナルが駆け寄った。

「聞いた? 警視庁の矢崎が来たっていう話し。」

「聞いたわ。私達に『関与するな』って言ったらしいわね。その自

信はどこからくるのやら…。」

「瑠奈…不思議に思わない?」

「…何が。」

瑠奈はエレベーターに乗ると…行き先階のボタンを押した後、手すりに寄りかかって腕組みをした。

「警視庁には瑠奈のどこにいるリイナちゃんみたいな英才も…和田教授のような天才もいないのよ?それなのに奴等はどっやって、我々の動きを封じるのかし…」

「!…まずい!」

瑠奈はシグナルの話しを聞くと、慌てて最寄り階のボタンを押した。

「しまった…気づかなかったわ!」

「えっ?な、何が?」

シグナルが啞然とするなか、瑠奈は振り返って彼女に説明した。

「矢崎の奴…基地内に部下を潜り込ませて、こちらの調査結果を全て奪う気なのよ!それなら調査する手間は省けるし、手柄は自分の物になる!」

「そうか!」

「研究室へ戻るわよ!」

その頃…。

地下の研究室では、作業中のリイナと和田教授を監視するかのよう
に…一人の男性研究員が二人を凝視していた。

瑠奈は非常階段を駆け降りて、地下の研究室に続く廊下を赤い衣を
なびかせながら走っていた。

「瑠奈っ！」

シグナルも追いかけてくると、拳銃を取り出して安全装置を外した。

「リイナや和田教授が解析したデータを警視庁へ送る為に何か策を
講じてる筈よ！私達がどんなに早く解析しても、奴等に筒抜けであ
る以上…先回りされて行動に制限をかけられてしまっ！」

「なんて卑怯な男なのっ!？」

「急ぐわよっ！」

「了解っ!！」

瑠奈とシグナルが全速力で通路を走っていく。

「リイナ、ちょっと休憩しましょうか。」

「ん〜!…はいっ！」

背伸びしていたリイナと教授が席を外すと…男性研究員が警戒しな

がら、二人の使っていたパソコンに近づいてきた。

「さて…このデータか？」

男性研究員がパソコンを操作し始めると、ハードウェアにUSBメモリーを差し込み…解析データを転送し始めた。

「馬鹿な奴等だ。自分達で自分の首を絞めやがって。」

カチャ…

「…本当、馬鹿よね？貴方。」

「！」

男性研究員が冷や汗をかきながら振り返ると、和田教授とリイナが彼の後頭部に銃口を向けて立っていた。

「先輩からメールが来たんです。」

リイナが開いた携帯…そこには、【警視庁と内通してる人間、そちらに潜伏中。】…と、書いてあった。

「矢崎にしては考えたじゃない…私達を逆に利用するなんて。」

「ま…この世の中、そんな都合良くいきませんけどねっ。」

リイナが銃口を向けたまま、パソコンのキーボードに触れた。

「このデータを転送したんだっ。」

「そ、そうだ…。」

「そっか。」

リイナが笑顔で Enter キーを押すと、数列が画面上に現れた後…ちっちゃいリイナがモニターに現れた。

「なっ!?!」

《ウイルスばらまいてやる〜! あっかんべ〜!》

「…どうかしら? 私が作成したリイナちゃんウイルスはっ。」

「これを送ったら、科捜研は大変な事になってるんじゃないですかあ?」

「はあ! はあ! はあ!」

「リイナッ! 玲子教授っ!」

「瑠奈! …教えてくれてありがとう、助かったわ。」

「先輩。今、矢崎さんにプレゼントを贈ったところですよ。」

「プレゼント?」

瑠奈とシグナルが首を傾げながら歩み寄ると…パソコンの画面を見て、何かを察したようだった。

「ふふふ、なるほど。」

「やるわね、リイナ。」

「だって、先輩の後輩ですから！【やられた分は、三倍返し！】…それが、私達のモットーですしっ！」

「ふふふ、そうね！」

瑠奈は微笑むと…男性研究員に振り向いた。

「さて、色々と教えてもらっわよ…。」

「矢崎の企みを洗いざらい吐いてもらっわよ？」

「あ、あああ！」

瑠奈とシグナルが男性研究員を威嚇しながら詰め寄ると…研究員は恐怖で身を震わせていた。

その頃…。

警視庁の科捜研では、矢崎がパソコンを操作する研究員の後ろで腕組みして立っていた。

「そろそろだな…グラスハイムから何か来たか？」

「…！今、メールが一通。」

研究員が答えると、矢崎は不気味に微笑んだ。

「よし、開け。」

研究員が受信したメールに添付されていたデータフォルダを開くと…突然画面上に例のコンピュータウイルスが現れた。

「なっ!?!」

「ウイルス…奴め、見つかったのか。おい!至急、メールごとデータを削除しろ。」

「了解!…ん?お、おかしいっ!データの削除が出来ない!」

「!…なにい!?!」

矢崎が机に勢いよく両手をつく。

「おのれえ…謀ったな。い、井上瑠奈あっ!」

矢崎が怒りの形相でモニターを見ると、リイナちゃんウイルスが笑顔で踊っていた。

「井上瑠奈め…このままで済むと思っなあ!」

矢崎は怒りのあまり。パソコンのモニターを殴りつけて壊してしまっただ。

一方…。

グラスハイムの研究室付近にある取調室で…逮捕された男性研究員

が、B A S T A R Rの警備班から尋問を受けていた。

「今は人間同士で争っている時ではなかるうちに。」

司令官のバランスが尋問の様子を伺っていると…瑠奈がゆっくり歩み寄った。

「はい…ですが、これがこの国の実状です。他の国で何が起きてよ
うと、我が身に起きなければ他人事ですから…。」

「彼らはクリーチャーに対し、何の危機感も抱いていない。以前、
千葉であれほどの大量虐殺があったというのに。」

「…。」

瑠奈が悲しそうに俯くと…バランスは彼女の心を察し、優しく抱き寄
せた。

「すまなかった。あの時の話しは…タブーだったな？」

「いえ、大丈夫です…。」

瑠奈とバランスが隣室で男性研究員の尋問を見ていると、室内の内線
電話が鳴りだした。

「はい…こちら、取調室。」

瑠奈が内線電話の受話器を取って応答すると、電話は管制室のレイ
チエルからだった。

【井上隊長！只今、目黒区上空にクリーチャーの目撃情報が入りましたっ。前回のカラスのやつみたいですっ！】

「！…バラン司令。」

「なんだ？」

「現在、目黒区に例のクリーチャーが出現した模様です。至急、対処に向かいます。」

「そうか…了解した、気をつけてな？」

「はっ！」

瑠奈はバランに敬礼すると、取調室を飛び出していった。

「封魔はオフィスか…。」

瑠奈は 部隊のオフィスに向かうと封魔を装備し、赤い衣を羽織って駐車場に向かった。

「ウィン！出撃するわよっ！」

「！…了解ッス！」

瑠奈が四駆車の後部座席に飛び乗ると…隣にレオンが乗り込んだ。できた。

「レオン！？あんたっ！」

「どんなに傷を負っても、来るなって言われても…俺は行くぜ？」

「…。」

レオンは自動小銃の弾倉をチェックしながら、静かに語り始めた。

「俺だつてクリーチャーには恨みがある…。軍にいた時…俺が所属していた部隊は、クリーチャーに潰された。生き残った仲間も離ればなれになつちまつた…今じゃ、生きてるかどうかも分かりやしない。」

「レオン…。」

レオンは弾倉を自動小銃に装填すると、決意の眼差しで瑠奈に振り向いた。

「奴等を根絶やしにしたいと思つてんのは、お前だけじゃねえつてこつた。それに、完治するまでおちおち休んでられつかよ。」

すると、瑠奈は微笑みながらゆっくり目を閉じた。

「全く…好きになさい。ワイン、出してっ…！」

「了解ッス！飛ばすッスよ！」

瑠奈達はグラスハイムを出発すると、急いで現場に急行した。

「あつちやあ！見てらんねえなあ！？」

「…ん？」

瑠奈達が現場に到着してみると…警察官達が上空のクリーチャーへ向かって、ひたすら発砲していた。

「ウィン、レオンをお願い！」

「了解ッス！」

「あ？俺は平気だっつうの。」

「強がっても駄目…脂汗、酷いじゃない。」

「…！レオンさんっ！」

「平気だ…っつてんだろっが！」

駆け寄ったウインをレオンが振り払う。

「ぎゃあああっ…！」

「…！」

叫び声を聞いた瑠奈達が咄嗟に振り返ると…翼を広げた巨大なカラスが、警察官を頭から噛みついて丸飲みしていた。

「行くわよ！散開っ！」

「おう！」

瑠奈が封魔を抜きながら走っていくと、レオンとウインは四駆車を

盾にして自動小銃を構えた。

「速くて狙いが定まらないッス！」

「うつせえ！集中出来ねえだろうが！」

空を旋回するカラスのクリーチャーに、狙いを定めるレオン。

「！…お、おいつ！？」

「じよ…冗談じゃないッスよ！？」

二人が啞然としながら空を見上げると…上空で旋回していた巨大なカラスのクリーチャーの周囲に、8匹の一回り小さなカラスが集まり…群れと化した。

「あれが親鳥か…空中にいる分、普通のクリーチャーより厄介ね。」

《先輩！聞こえますかっ！》

「リイナ？」

瑠奈がイヤホンマイクを掴んで応答すると、B A S T A Rのヘリが上空を通過していった。

《レオン！レオンの射撃の腕なら、カラスなんか目じゃないでしょ？》

旋回してきたヘリの後部ハッチが開くと、リイナがB A S T A Rの開発した対クリーチャー用ライフル【A C R ー 1 9】をレオンに向

かって投げた。

「へっ…あたぼうよっ！」

レオンがライフルを受け取って笑顔で頷くと、リイナが乗るへりに一羽のクリーチャーが急接近してきた。

「！…やらせないっ！」

瑠奈がクリーチャーに気付き、走り出す。

「封魔っ！第一可変形態っ！！」

『了解しました。【正宗】起動します。』

「はあっ！」

「…瑠奈、飛ぶなっ！」

「！…レオン！？」

瑠奈が振り返った瞬間…レオンはライフルで、へりに接近していたクリーチャーの頭を撃ち抜いた。

「へっ…狙撃は得意だね。軍でトップクラスの腕だったんだぜ？」

「人は…見かけによらないわね？」

瑠奈が笑顔でそう言うと…レオンはライフルを構えて、再び狙いを定めた。

「俺様の本領発揮だ…よく見てろよ、瑠奈あつ！」

レオンがライフルを連射すると…次々にクリーチャーが撃ち抜かれていく。

「クリーチャーは皆殺しよ…。」

瑠奈は急降下してくるクリーチャーを睨みながら、封魔を構えた。

「はああつ！」

瑠奈は、一羽をすれ違いざまに両断すると…もう一羽を廻し蹴りで叩き落とした後にその頭へ刃を突き刺した。

「たあつ！」

瑠奈は時間差でやって来たクリーチャーのクチバシを勢いよく蹴り上げると、胴体に封魔を突き刺して横へ切り裂いた。

「！…後ろっ！」

背後から飛んで来たクリーチャーの頭部を、振り返ると同時に鞘で殴りつける瑠奈。

「女の子を背後から襲うなんて…レオンだけじゃなかったのねっ！」

瑠奈は鞘で殴りつけて地面に落ちたクリーチャーの首を斬り落とすと、咄嗟に空を見上げた。

「終わりッスかね？」

「お前…何もしてなかったじゃねえか。」

「まだよ…。」

「え？」

《はい。》

瑠奈は鞘に封魔を納めると、レオンとウィンに振り返った。

「さっきまでいた親鳥がない…逃げたみたいね。」

「そついやあ…確かにいねえ！」

瑠奈達が空を見上げると…B A S T A Rのへりがゆっくり降下してきた。

「リイナ。」

へりが着陸すると…リイナがミニパソコンを片手に降りてきた。

「先輩！和田教授と一緒にクリーチャーの遺伝子配列を調査したところ、クリーチャーの遺伝子に操作された形跡があるのを発見しました。」

「！…という事は、まさか。」

「人工的に誰かがクリーチャーを造り出したのかよっ！？」

瑠奈が驚いている脇でレオンが叫ぶと、リイナは険しい表情で頷いた。

「動物がクリーチャーになると、体内には【C型細胞type A】ってというのが生成されるの。その細胞がある意味、クリーチャーの強さの秘密なんだけど…。その細胞がカラスの遺伝子に無理矢理組み込まれていたの。」

「だけど、その研究中にカラスは脱走し…自ら繁殖を始めたって感じかしら。矢崎が動いていたのは…この事実を隠蔽する為だったんでしょうね。」

「はい、恐らく…。」

「このご時世にクリーチャーを人工的に造り出すなんざ…馬鹿がする事だぜ。」

「全くツスよっ！」

「先輩、これからどうしますか？」

「カラスクリーチャーの親鳥はまだ倒していない…都内に潜伏し、再び繁殖されても困るわ。リイナ…都内で昔、カラスの被害が酷かった場所の探索って可能かしら。」

「もちろんですっ！…けど、ここでは何ですから機内に行きませんか？飲み物とか持ってきました。」

「ありがとう…じゃあ、ちょっと休みましょうか。誰かさんの背中

を手当てしないとイケないしね?」

「!…瑠奈がしてくれんのかっ!?!」

「まさかっ…ウイン、お願いね。」

「けっ!そっだよなあ?…瑠奈がそんな優しいわけねえもんなあ。」

「

「…ふん。」

「いってえ!」

瑠奈はレオンの足を勢いよく踏みつけると、リイナを連れてへりに乗った。

「ん」と、カラス…カラスとつと。」

リイナが大好きなドーナツをくわえながら、ミニパソコンで調査している…へりに緊急連絡が入った。

《瑠奈及び 部隊、聞こえるかっ!》

「 balan司令?…はい、こちら。」

《現在、カラス型クリーチャーが東京各所に出現したと連絡が入った!全部隊が迎撃に向かったが、戦力不足だ。直ちに 部隊も、迎撃に向かえっ!》

「了解しました。」

「先輩、ゆつくり調べている時間はないみたいですね？」

「ええ！頼むわよ、天才リイナ・カーディガルっ。」

「お任せあれっ。」

くわえていたドーナツを口に入れて、リイナは笑顔で敬礼すると…
パソコンと睨みあった。

「さあ、いきますよ〜！」

リイナが猛スピードでミニパソコンのキーボードを操作していく。

「相変わらず、タイピング速えなあ…。」

レオンとウィンが唖然としながら見ていると、モニターを睨みつけていたリイナが勢いよくEnterキーを押した。

「見つけたっ！かつて東京都にあったっという、【カラス三大ねぐら】っ！」

「さすが速いッス！」

「どっっ！」

瑠奈が問いかけると、リイナはモニターを凝視した。

「現在残っている三大ねぐらは…！…！…！明治神宮のみっ！」

「北だなっ！」

「お見事よっ！リイナっ。」

「へへへ〜！」

瑠奈に誉められると、リイナは頬を赤らめて照れていた。

「レオンはワインとヘリで空中から狙撃っ！私は陸路で向かうわっ
！」

「先輩、でも四駆車の運転は？」

問いかけてきたリイナに歩み寄り、その肩に手を置く瑠奈。

「へっ？…え、ええ！？わ、私ですかあ！？免許ありませんよ、私
っ！」

慌てて両手を振るリイナ。

「大丈夫よ…二つあるペダルのどちらかを踏めばいいだけなんだか
ら。緊急事態だし…車を傷つけたりしても、クリーチャーにやられ
たって整備に言えばオッケーよ。」

「む…無茶苦茶な。」

レオンが苦笑いすると、リイナは暫く考えた後…笑顔で頷いた。

「わかりましたっ！」

「よろしいっ…それじゃあ、隊総出で大暴れするわよっ！」

「了解っ！！」

瑠奈達が行動を開始した頃…東京の至るところで、銃声が聞こえていた。

「くっ！」

部隊を率いてクリーチャー迎撃に出ていたシグナルは、弾をリロードすると空から迫るクリーチャーに自動小銃を連射した。

「隊長っ！後ろですっ！」

「！…はっ！」

シグナルは振り向くと同時に踵落としを放って、クリーチャーを叩き落とすと…その頭を自動小銃で撃ち抜いた。

「各員、攻撃の手をゆるめないでっ！油断したらやられるわ！」

「了解ですっ！」

シグナルは振り返り血を拭いながら、必死にクリーチャーを迎撃していた。

「数が多すぎるわ…このままだと…ん？」

シグナルが空を見上げると…【】と機体下部に記した一機のへりが、明治神宮方面へと飛んでいった。

「あれは…部隊の。ふふふっ、心配しなくても平気かな?…皆っ、
気合い入れなさい!」

「はっ!」

「頼むわよ?…瑠奈っ!」

シグナルは 部隊のへりに笑顔でそう告げると…必死にクリーチャ
ーを迎撃している部下達の元へ向かった。

「…間もなく、明治神宮上空ですっ!」

「サンキュー、運ちゃんっ!」

へりの操縦士に礼を言うと…レオンは後部ハッチを開放し、ライフ
ルを構えた。

「ちよっ…危ないツスよ!??」

ウィンが慌てるなか、レオンは空中を飛ぶクリーチャーに照準を合
わせた。

「へりの機内から…狙撃する方が危ねえつつうのっ。」

猛スピードで旋回し、迫ってくるカラス型クリーチャーに照準を合
わせるレオン。

「さあ、パーティーの始まりだぜえ!!」

レオンがライフルで次々にクリーチャーを撃ち落としていくと、ウインも恐る恐る後部ハッチへ向かい…自動小銃で迎撃を始めた。

「いるいるいるう…おらあっ！」

レオンは爪をたてて襲ってきたクリーチャーに、蹴りを入れると頭をライフルで撃ち抜いた。

「よし！…ん？ちっ、弾切れかよっ！」

レオンはライフルを投げ捨てると…腰から拳銃を抜いて、迎撃を再開した。

「数が多過ぎるッス！」

「いいから黙って撃て！死にてえのかっ！」

レオンがウインに叫ぶなか、操縦士が突然叫んだ。

「しまった、囲まれたっ！」

「！」

レオンとウインの乗るヘリの周囲に、クリーチャーが集まってくと…ヘリに向かって一斉に襲い掛かった。

「うわぁ！…！」

「チクシヨ〜！手が足りねえ！」

ウィンが腰を抜き、レオンが必死に撃つなか…迫り来るクリーチャーの群れ。

「も、もうお仕舞いッス！」

「くっ！」

レオンが死を覚悟して、目を閉じた時だった…。

脳裏に…【封魔】と記された赤い宝玉が現れ、激しく光り輝いた。

『大丈夫…貴方達には、彼女がいるから。』

「！…女の声？」

レオンは頭の中に響いた謎の声を聞いて、目を開けると…ヘリの周囲を赤い真空波が次々と通過し、クリーチャーを消し飛ばしていた。

「！…今のはっ！」

レオンが後部ハッチから地上を見下ろすと…土煙を上げながら爆走する、一台の四駆車があった。

《…レオン？少しは獲物をとって来てくれたかしら？》

「この声！…レオンさんっ！」

ウィンが嬉しそうに振り向くと…レオンも笑顔で頷いた。

「ああ！来やがったぜっ。クリーチャー！…てめえらの天敵がお出
ましたーっ！！」

四駆車の屋根の上で、片膝をついて座っていた瑠奈が…ゆっくりと
立ち上がる。

《瑠奈、心配すんなっ。まだ、うじゃうじゃいるぜっ！》

「みたいねっ！…リイナ。」

「は、はいっ！」

涙目になって必死に運転しているリイナが、叫び声のような声で返
事をする。

「怖くなったら、すぐに逃げなさい？」

「今すぐにも逃げ出したい気分ですう！」

リイナが笑顔で泣きながら叫ぶと、瑠奈は苦笑いしながら封魔を握
りしめ…上空のクリーチャーを見上げた。

『このエリアだけでも、クリーチャーの総数が50体を超えていま
す。』

「そ、そんなにいい！？」

「面白い…クリーチャーは1体残らず、皆殺しよ。」

『瑠奈。敵の総数が多い為、薙刀型可変形態【青龍】を推奨します。』

「了解、任せるわっ！」

『了解しました。薙刀型可変形態【青龍】起動します。』

封魔の宝玉が光り輝くと…【青龍】と文字が宝玉に表れた後、刃が粒子レベルで分解されると同時に柄が勢いよく伸びた。

反った幅広い刃が再構成されると、瑠奈は柄を掴んで頭上で振り回して身構えた。

「これが…青龍。」

『クリーチャー、前方より二羽接近。』

「了解…はあっ！」

瑠奈は封魔を勢いよく振りかぶってクリーチャーに斬りかかると…クリーチャーは上下に斬り裂かれた。

「見た目より全然軽いし、扱いやすい…これならいけるわっ！」

瑠奈は四駆車の上から飛び降りると…クリーチャーを倒しながら、明治神宮の参道を走っていった。

「これ以上、増加させる訳にはっ！」

瑠奈が空中から襲い掛かるクリーチャーを倒しながら、境内の前を駆け抜けていくと…上空のレオンから通信が入った。

《瑠奈、そのまま進めっ！地面にでっけえ穴が開いてやがらあ！》
へりに乗ったレオンがイヤホンマイクを持って叫ぶと、瑠奈は涙目
になって耳を塞いでいた。

「レオン！…教えてくれるのはありがたいけど、無線で叫ぶなっ！
耳が痛いじゃないっ！」

《うおおっ！？お、おめえもなあ！》

「ふふっ…馬鹿なんだから。」

『瑠奈。青龍は柄を分割、双剣【双龍剣】にもなります。』

「本当！？…お願いっ！」

『了解しました。【青龍】を分割、【双龍剣】起動します。』

封魔の刃が再び粒子レベルに分解されると、柄が通常の長さに戻っ
て中央から真っ二つになり…その柄の先端に刃が再構成されていく。

瑠奈は双剣となった封魔を両手に握って走っていくと、クリーチャ
ーを斬り倒しながら駆け抜けていった。

「邪魔あつー！」

瑠奈は飛んできたクリーチャーを斬り裂くと…噛みつかんと真横か
ら飛んで来たクリーチャーの口に、封魔を突き刺して斬り裂いた。

『背後から、一羽接近。』

「!…はあっ!」

瑠奈は宙返りすると、クリーチャーを地面に蹴り落とし…その上に勢いよく座った。

「クエエツ!」

「失礼ね…重くなんかないわよ!」

瑠奈はクリーチャーの頭を斬り落とすと…再び走りだした。

「穴はまだっ!?!」

必死に走って草むらを抜けると…瑠奈の目の前に巨大な穴があった。

穴からは次々にカラス型クリーチャーが、空に上がっていく。

「見つけたのは良いけど、どうやって塞げば!」

瑠奈が啞然としていると…草むらを飛び越えて、BASTARの四駆車が走ってきた。

「先輩っ!私が運転してるこの車を穴に落としますんで、それを爆破して下さいっ!」

「リイナ!?!」

「ガソリンに引火して爆発すれば、あれくらいの穴なら塞ぐ事が出

来ます！」

「了解、分かったわ！封魔、正宗に変形！」

『了解しました。』

瑠奈が正宗に変形した封魔を振りかぶると、リイナが運転席のドアを開けた。

「えいつ！」

リイナが草むらに飛び降りると、四駆車が勢いよく穴に向かって走っていく。

「いたたた…先輩、今ですっ！」

草むらから顔を出したリイナが叫ぶと、瑠奈は力強く頷いた。

「了解っ…封魔っ！」

『流華一閃、エネルギーチャージ。』

封魔の刃に赤いエネルギーが蓄積始めると、瑠奈は四駆車に狙いを定めた。

「はあっ！」

踏み込んだ地面が陥没する。

「流華…一閃っ！」

瑠奈が勢いよく封魔を振るうと、赤い真空波が四駆車に向かって飛んでいき…大爆発を起こした。

「きゃあああっ！」

《！リイナツ、あぶねえ！》

「えっ？…！」

頭を抱えてしゃがんでいたリイナが振り返ると…爆発した四駆車のタイヤが勢いよく飛んできた。

「きゃあああ！」

ザクツ！

「…へ？」

リイナが恐る恐る顔を上げると…瑠奈が封魔でタイヤを突き刺し、笑顔で立っていた。

「先輩っ。」

「大丈夫？…じゃ、帰るわよ？」

「えっ？…でも、まだクリーチャーは残ってますよ？」

リイナがキョトンとしながら問いかけると、瑠奈は封魔を鞘に納めた。

「私達は増加の源を断つたのよ？残存するクリーチャーの掃討は、シグナル達に任せましょ。」

「…了解ですつ。」

瑠奈はリイナに手を貸し、立たせると…降下してきたへりに歩いていった。

夕方…。

各隊員達が食堂で夕食を摂っていると、シグナルが物凄いスピードで走ってきた。

ダダダダ…

「…瑠奈あ！」

シグナルは食堂の扉を勢いよく開けて、中に入ると…その場にいる全隊員を見渡した。

「…や。何、シグナル。」

リイナと食事をしていた瑠奈が素知らぬ顔で声をかけると、シグナルが怒りの形相で歩いてきた。

「瑠奈！？いくらクリーチャーの巣を叩いたからって…直ぐに部隊を退かなくてもいんじゃないっ!?!」

「…。」

「私達と で必死に戦って、帰って来たのついさっきよ!?!? ついさっき!」

「…お疲れ。」

「!…!…! 瑠奈っ!何か言ったらどうなの!?!?」

「…。」

「瑠奈っ!」

「…ちょっとトイレ。」

「…ちょっと待ち。」

去ろうとした瑠奈の着物の襟を、シグナルがしっかりと掴んだ。

「瑠奈…正直に言いなさいっ。」

「…。」

「面倒臭かったんでしょ?」

シグナルに問い詰められ、冷や汗をかく瑠奈。

「凶星かぁ! 瑠奈ぁ!」

「!…!…! シグナル! あんたの好きなアイドルグループの【tomorrow】よっ!」

「えっ！嘘っ、どいどいっ！？」

「あそこよーあそこあそこっ！…よしー！」

シグナルが外をキョロキョロしているうちに、足早に逃げる瑠奈。

「ん？…あ！待ちなさい、瑠奈あ！」

「せ、先輩…。」

悲しき再会

明治神宮でのクリーチャー殲滅戦から一週間が経過した。

「…ごちそうさまでした。」

瑠奈は朝食を済ませると、食器を返却口に持っていった。

「瑠奈ちゃん、ちょうど良かったわ!」

「ん?」

瑠奈は話しの内容が分からず、首を傾げると…洗い場のおばちゃんからパンのみみが沢山入った袋を手渡された。

「何?…これ。」

「すまないんだけど、食堂裏に飼ってるウサギ達に餌をやってもらえないかい?病気で急遽、従業員が一人休んじゃってね…餌をやりにいけないのよ。」

「…ウサギ。」

瑠奈は静かに呟くと…洗い場のおばちゃんからパンのみみが入った袋を受け取り、食堂を出ていった。

「クリーチャーさえいなけりゃ、優しい良い子だったんだろっくに…
可哀想にねえ?」

洗い場のおばちゃんは去っていく瑠奈の後ろ姿を見て…そう呟いた。

「なんで私が…ウサギなんかの為に。」

瑠奈は文句を言いながら食堂の裏に向かうと、突然足を止めた。

「…あ。」

思わず声を発していた瑠奈の目の前には小さな飼育小屋があり、中には三匹のウサギがピョンピョン跳ねながらじゃれあっていた。

「…。」

瑠奈は静かに歩み寄ると、しゃがんでウサギを見つめた。

「…。」

すると、1匹のウサギが瑠奈の前までやって来た。

「な、何？」

お互いに見つめあう瑠奈とウサギ。

「…。」

「…。」

「…可愛い。」

「…何やってんの？瑠奈ちゃん。」

「！」

瑠奈は背後からした声に驚き、赤面しながら振り返ると…先程のおばちゃんが笑顔で彼女を見つめていた。

「食堂は？」

「大丈夫よ？交代が来てくれたからねえ。」

おばちゃんは瑠奈の横にやって来ると、笑顔で問いかけた。

「瑠奈ちゃんは動物好きなのかい？」

「クリーチャー以外…可愛いのなら。」

「あはは。あれは、皆嫌いよねえ。」

「…。」

ウサギを見つめ…笑顔になる瑠奈。

おばちゃんは動物小屋へ入ると、フン等の掃除を始めた。

「昔は鶏もいたんだけどねえ？クリーチャーの日本襲来の際に逃げ出しちゃって、今頃食われちゃったろうねえ…きつと。」

「そう…ですか。」

「あ、瑠奈ちゃん。パンのみみ、ありがとうね？」

「いえ…。」

「これからも気軽に見に来なさい。」

「はい、そうします。」

おばちゃんに袋を渡すと…瑠奈はウサギに笑顔で手を振り、動物小屋を後にした。

その日の深夜…。

グラスハイム敷地内の警備を担当する 部隊の隊員二名が、四駆車で各施設周辺を巡回していた。

「ん？」

「?…どうした。」

四駆車が食堂の前を通り掛かった時…隊員の一人が耳を傾けた。

「いや、今…何かの物音がしたような。」

四駆車を食堂の前に停車させ、自動小銃を構えながら二人は歩いていく…。

ガサガサ…

「!…今したよな。」

「…ああ。」

隊員達は自動小銃の安全装置を外すと、気配を殺しながら食堂の裏手へ向かった。

すると…大型犬くらいの大きな影が飛び跳ねながら、二人へ迫って来た。

「な、なんだ!？」

「クリーチャーかっ!」

二人が慌てて自動小銃を撃つ。

しかし、その影は弾を軽々とかわした後…爪を振りかぶって襲い掛かってきた。

「ひっ…ぎゃあああっ!」

「おいっ!」

腹部を切り裂かれて絶命する相棒を見て、恐怖する隊員。

「か、管制室! 応答を! 管制し…!」

必死にコールを続けていた隊員の背後から、鋭利な爪が迫ると…彼の首が地面に転げ落ちた。

その頃…。

深夜の管制室には、レイチエルと二名の男性隊員が任務に着いていた。

「ふわああ…あかん、寝不足やあ。ゲームし過ぎたしなあ？」

レイチエルが目を擦りながらそう言つと、男性隊員らが笑っていた。

「ははは！…そついや、レイチエルさん。我々管制官を束ねるリーダーなのに、どうして【管制長】と名乗らないんですか？」

「そつそつ。俺も気になってたんだ。」

男性隊員らが問いかけると、レイチエルは苦笑いしながら手を振つた。

「お堅いのはちょっとなあ？うちのんびりやりたいんですよ。」

「まあ、気軽にやるのが一番ストレス溜まりませんよね。」

「そついう事っ。」

ピピッ！ピピッ！

「ん？…はい、こちら管制室。」

「？…何かあったん？」

レイチエルは、男性隊員の一人が応答した後に首を傾げていたので、気になって問いかけた。

「隊からなんですが…急に通信が途絶えました。」

「再度コールして。まさか、グラスハイム内にクリーチャーが潜伏したとは思いたくないけど…。隊のオフィスにも連絡しとき！」

「了解つ。」

「嫌な予感がするわ…縁起でもないけどなあ。」

その後…。

管制室から連絡を受けた 部隊の隊員が四駆車で食堂へやって来ると…無惨な姿で息絶えている仲間を発見した。

「えっ、食堂の裏手で殺人事件？」

翌日…。

レイチエルとリイナが一階の喫茶店で、きな粉餅を食べながら話をしていた。

「そや。深夜未明、無言通信があって調査した結果…分かったんやけど。」

「ふむふむ…あ！きな粉の多いとこ頂戴っ。」

「ええよっ…で、連絡を受けた 部隊の増援が現場に急行すると、隊員が二人死んでいたらしいわ。」

「遺体の場所がよく分かったね。」

「通信の発信元を調べたから教えといたんよ。」

「なるほどつ。隊ウチに連絡してくれれば良かったのに。」

リイナがお茶を飲みながらそう言うと…レイチエルはテーブルに肘をつき、箸で彼女を差しした。

「せやかて…リイナんとこ、24時間待機の任務すつぽかしてるやん。」

「あ…あははあ。」

リイナが苦笑いしながら、最後のきな粉餅に箸を伸ばすと…いつの間にかテーブルの横へ来ていた瑠奈が、最後のきな粉餅を素早くつまんで口に運んだ。

「ああ〜！」

「ん、美味しいわね？…ほら、行くわよ。」

「井上隊長つ、しっかりしてますわ。」

「酷いですよ、先輩っ！最後の…つだったのにい。」

ふて腐れるリイナに振り返り、苦笑いする瑠奈。

「今度好きだけ奢るわよ？…レイチエル、リイナを借りるわ。」

「はいなっ、いつてらっしやいっ!」

瑠奈は 部隊の面々と食堂へやって来ると、裏手に向かった。

「うわあ〜!ウサギだあ!洗い場のおばちゃん達…食堂の裏でウサギ飼ってたんですかあ!」

「私も昨日知ったの。」

リイナが動物小屋のウサギの絵を見て、嬉しそうに走っていく。

「俺はウサギよりも鰻が良いッス。」

「その腹は鰻の油で出来てんのか?納得だわっ!」

「…きやあ〜!」

「!…リイナッ!」

瑠奈達がリイナの悲鳴を聞き、走っていくと…動物小屋が血で真っ赤に染まっていた。

「な、何だこらあ〜!?!」

「ウサギさあん?出ておいでえ!」

リイナがしゃがんで動物小屋を覗くも…ウサギの姿は見当たらなかった。

「いないツスねえ？」

「こんな小屋じゃ…ウサギも気味悪がって、住みやしねえよ。」

「?…なんスかね?あれ。」

「あれ?…あれって?」

「あれツス。」

瑠奈が問いかけると、ウインは地面に点々と落ちている液体を指差した。

それは動物小屋の金網が破られている所から草むらの中へと続いており、そこから小さな動物の足が出ていた。

「!…お、おい…まさか!」

「!」

「!…先輩っ!?!」

瑠奈が慌てて走り出すと、皆も後に続いた。

「!」

瑠奈が草むらをかき分けてみると、ウサギが腹部から血を流して死んでいた。

「酷い…。」

「ひでえ事をしやがる。」

「クリーチャー…許せないッス！」

瑠奈はおもむろにウサギを抱き上げると、冷たくなったその体を優しく抱きしめた。

「先輩…。」

「痛かったよね？…君にこんな事した犯人は、私が必ずやつつけるから…。」

「隊長…。」

ウィンが呟くと…瑠奈は怒りの形相で、ゆっくり顔を上げた。

「クリーチャー…絶対に許さないっ。」

復讐を誓った瑠奈達は、深夜…この食堂付近で張り込みをする事にした。

夜になると…瑠奈達は四駆の中に待機し、張り込みを始めた。

「レイチエルの話ですと…被害者からの通信があったのは深夜2時前。」

「草木も眠る丑三つ時…てかあ？」

「レオン…。」

「あんだよ、瑠奈。ぼかんとして。」

「いや…あんたの頭には下ネタしかないと思っていたから。意外だ
なつて…。」

「がくっ!」

「ししっ!」

「あはは!」

夜風も冷たい深夜…。

車内から周囲を警戒していた瑠奈は、突然太ももにした感触に驚い
て振り向いた。

「?…なっ!??」

「!…!…いつで!」

いつの間にか自分の膝を枕にしていたレオンを、全力で殴り起こす
瑠奈。

「いつてえな!」

「静かに…レオン、ちょっと見てきなさい。」

「お、俺に…死ねと?それに、なんで俺なんだよ!」

「…頼りにしてるからよ。」

瑠奈が真顔でそう言うと…レオンは恥じらいながら、頬をかいた。

「しゃ…しゃあねえなあ、今回だけだぞっ。」

上機嫌で四駆を降り、食堂の裏手に向かうレオン。

「ちよつとおだてれば、すぐにあれだもん。困っちゃいますね?」

「本人には気付かれないようにね?何とかとハサミは使おう…っ
て言うじゃない。」

「隊長〜。」

瑠奈に苦笑いするリイナと運転席のウィン。

すると、助手席のリイナがミニパソコンを開いた。

にしてもおかしいですね…現在、周辺にクリーチャー反応がありません。」

「…封魔。」

『私のサーチにも反応無しです。』

「そっ。」

瑠奈が封魔に返事をしたその時…。

食堂の周囲を囲む木々の上から、大きな影が瑠奈達の乗る四駆車の屋根へ下りてきた。

「きゃあ!」

「何スカ?今のズシン音…。」

「車の屋根に何か…。」

「ん?...!?!」

瑠奈がふと外灯に照らされて出来た車の影を見ると…その屋根部分に爪らしき物を伸ばして振りかぶる化け物の影があった。

「!...二人とも、今すぐ車から降りて!」

「えっ?...ひい!」

振り返ったリイナとウインの間へ、屋根を貫いたクリーチャーの鋭利な爪が現れた。

「きゃあ!」

「うわあ!?!」

「くっ!」

ウインとリイナが車から飛び出た後…瑠奈が降りると、例のウサギ

が赤い目を光らせて彼女を睨みつけていた。

「クリーチャーめ…あの三匹の中に紛れ込んでいたの？」

クリーチャー化したウサギが爪をたてて、瑠奈に襲いかかる。

「！…くううつ！？」

瑠奈は咄嗟に鞘で爪を受け止めると、地面にヒビが入った。

「ウサギ…あの…。」

瑠奈の脳裏に、昨日出会った…人懐っこいウサギが浮かんできた。

「ウサギを…あのウサギを…よくも殺したなあーっ！」

瑠奈は怒りの形相で爪を払うと、鞘から封魔を抜いた。

「許さない…お前達、クリーチャーは。」

瑠奈がクリーチャーを睨みながら、静かに呟いた。

「…皆殺しだあぁっ！」

瑠奈が封魔で斬りかかると…ウサギ型クリーチャーは、近くの草むらへ素早く逃げ込んだ。

「…速いつ。」

「どこッスか!?!？」

拳銃を構えたりイナと自動小銃の安全装置を外したウインがやって来て周囲を見回すも…ウサギ型クリーチャーの姿は、何処にも見当たらなかった。

「…。」

ガサガサ…

「!…はあぁっ!」

背後の草むらからした物音を聞き、封魔を振るう瑠奈。

タタタタ…

「えっ!?!」

瑠奈は草むらから出てきた影を見るなり、思わず封魔を振り上げた。

「せ、先輩?」

「…君。」

瑠奈が見つめる先には…昨日のウサギと同じ模様のウサギが、ちょこんと座って彼女をジッと見つめていた。

「…無事、だったの?」

瑠奈が笑顔で歩み寄ると、そのウサギは仲間の返り血を浴びたのか…体毛が所々赤く染まっていた。

「大丈夫。もう…平気。」

瑠奈がしゃがんで微笑みながら、ウサギに手を伸ばした瞬間だった。

『瑠奈、そのウサギからクリーチャー反応が。』

「!?!?!くっ!」

瑠奈が驚くとウサギの目が赤くなり、爪をたてて彼女に襲い掛かった。

咄嗟に爪を掴んだ瑠奈の手から、真っ赤な血が流れ落ちていく。

「先輩?!?!」

「隊長?!」

リイナとウィンが射撃してクリーチャーを遠ざけると、瑠奈に駆け寄った。

「先輩?!」

「…危なかった。ありがとう、二人とも。」

「ウィツス!」

瑠奈は封魔を構え、二人と一緒に周囲を警戒した。

「見失った……リイナ、CLを。」

「はいっ！」

リイナがミニパソコンを開くと、キーボードを操作し始めた。

「クリーチャー反応……私の後ろっ!？」

「!」

リイナが唾然とするなか、後ろに爪を振りかぶったクリーチャーの姿が現れた。

「リイナッ!しゃがめっ!」

「!……うんっ!」

バババツ!

リイナがしゃがんだ直後……帰ってきたレオンが自動小銃を連射し、クリーチャーを遠ざけた。

「ウイン!バツクアップ出来てねえぞ!何してやがった!」

「レオンさんっ!す、すみませんッス!」

シュツ……シュシュツ……

周囲にある草むらの中を、クリーチャーが移動する音が聞こえる。

「！…今のを避けやがったのか！」

「！…そうでもないみたいよ。」

瑠奈が微笑んで地面に指差すと…クリーチャーの通過した跡には血痕があった。

「当たってんな…落ちてる血の量からして一発くれえか。」

「だけど上出来よ。」

瑠奈は封魔を握ると、血痕が続く草むらの中へ入っていった。

「誉められた…瑠奈に俺、初めて誉められたっ！いやっほ〜！」

「レオン…初めて100点取った小学生じゃあるまいし…。」

「よ、幼稚なりアクションッス…。」

瑠奈が後を走っていくと…次々に落ちていく血の軌道が、彼女の方へ向きを変えた。

「！…来るっ！」

瑠奈が封魔を構えた瞬間…目の前から凄まじい勢いで真空波が飛んできた。

「うあああっ！」

腕や太ももに切り傷を負い、片膝をつく瑠奈。

リイナ達が走ってくる…目の前で必死に立ち上がる瑠奈を、心配そうに見つめていた。

「先輩…。」

「くっ…速い。」

瑠奈が再び封魔を構えると、左肩から血が吹き出た。

「なっ!?!…くっ!?!」

左肩を掴んでしゃがんだ瑠奈の目の前に、突然クリーチャーの膝が現れた。

「!…ああっ!?!」

額に膝蹴りを食らって上体を後ろに反らした瑠奈へ、クリーチャーが爪で斬りかかった。

「くっ!」

咄嗟に地面へ両手をつき、クリーチャーの爪を蹴って攻撃をかわすと…クリーチャーは草むらの中へ再び消えていった。

「危なかった…。」

「瑠奈っ、大丈夫かっ!」

駆けつけたレオンが瑠奈と背中合わせになり、周囲を見回すも…クリチャーの姿は見えなかった。

「よくこういう場面だと…『目に頼るな、心で気配を感じる。』…とか言っけどよ。」

「なら、閉じてごらんなさい？目を閉じた瞬間に殺されるわよ？」

「い、嫌だ…。」

体中の傷が痛むなか、レオンと周囲を警戒する瑠奈。

「どうすれば奴が見える…どうすればっ。」

瑠奈が封魔を構えながら模索していると、真上に大きな影が現れた。

「上かつ！」

レオンが自動小銃を連射するなか、クリチャーは瑠奈の目の前に着地した。

「！…やられるっ！？」

瑠奈の眼前に、クリチャーの爪が迫る。

「！…瑠奈あ！」

「んっ！」

バツ！

「!?!?!? ギイイイ!」

「ま、眩しっ!?!」

「な、なんだっ!?!」

瑠奈達が空を見上げると…光りを煌々と放つ玉がゆっくりと降下し、周囲を明るく照らしていた。

「閃光弾…。」

「…瑠奈っ!」

「!」

瑠奈が振り返ると…バズーカを構えたシグナルがジープに乗ってやって来た。

「瑠奈っ!見渡しのきく今なら!」

「ええっ!?!封魔、【正宗】起動!」

『了解しました。』

変形して太刀の形態となった封魔を振りかぶり…クリーチャーを睨みつける瑠奈。

「人間の動物を愛でる気持ちを踏みにじった罪は重いわ…消えなさ

いつ！」

『流華・一閃、スタンバイ。』

「はぁあっ！流華一閃っ！」

瑠奈が封魔を振るうと…赤い真空波がクリーチャーを襲い、粉々になっ
て消し去った。

「…。」

瑠奈は無言のまま封魔を鞘に納めると…悲しそうな表情を浮かべた。

「…ウサギ、可愛かったのにな。」

「クリーチャー化しなきゃあ…ね。」

シグナルが歩いてくると、瑠奈は振り向いた。

「シグナル。」

「瑠奈？…何。」

「 balan 司令にお願いしたい事があるの…一緒に balan 司令の所へ
行ってくれない？」

「え、ええ…構わないけど？」

シグナルがキョトンとしながら頷くと、瑠奈は笑みを浮かべた。

そして、二日後…。

「可愛い〜!!」

「ホンマ可愛いなあ!」

「…瑠奈の言ってた司令へのお願い事って…。

「これッスか…。」

飼育員の格好をしたレオンとウインが啞然と見つめる先には…リイナとレイチエルがウサギを抱いて、頬擦りしていた。

瑠奈はシグナルと共にグラスハイムの殺伐とした空気を一新するという目的も兼ね、敷地内でウサギを飼う事をバランに懇願した。

最初は反対していたバランも、支部長の黒田が了承してしまったので渋々願いを聞き入れた。

「その…反対してた司令閣下がよお。」

「ハッハッハ!結構、可愛いものだなっ。よしよし!」

バランがウサギを抱き、女性隊員達と一緒にニコニコしている。

「メロメロだもんなあ!…転職考えつかない。」

「そう!じゃあバイバイ、今までありがとう!さよなら。」

「瑠奈っ!…う、嘘だった!」

「もう会うこともないわねっ？さよなら…頑張って、素敵な彼女を作りなさい？」

「る、瑠奈あゝ！」

「先輩…絶対、楽しんでるよ？あれ。」

「確かに…。」

抱きついてきたレオンを肘打ちで叩き落とし、シグナルの隣に並ぶ瑠奈。

「…今夜ね？」

「そうね、今夜が勝負よ。」

「いでで！…ん？」

瑠奈は頭を擦っていたレオンに振り向き、問いかけた。

「レオン…今夜は暇？」

「え？まあ…ひ、暇っちゃあ暇だけど。」

「そう…じゃあ、今夜…私に付き合いなさい。」

「は…はいつ！？」

「朝まで…ゆっくりベッドでね。」

「ベツ…ベツドゥー!?!」

鼻息を荒くして興奮するレオン…。

しかし、彼は知らなかった。

彼の死角で、シグナルが必死に笑いを堪えていた事に。

「じゃあ、今夜…楽しみにしてるから。シグナル、行きましょう?」

「え、ええっ!」

シグナルは震えながら笑いを必死に堪え、瑠奈についていった。

「…あいつ、本当に単純。」

瑠奈が苦笑いすると、シグナルが笑顔で話しかけた。

「瑠奈…貴女、ホントに彼の心掴むの上手いね?」

「あいつは他の人に比べて、人一倍単純だから。」

「それって単純じゃなくて、単に瑠奈の事が好きだけじゃ…。」

「何か今…背筋が寒くなったけど。なんか言った?」

「う、嘘よ!封魔を鞘から抜かないでえ!」

封魔の柄を掴みながら睨みつける瑠奈を見て、シグナルは慌てて謝罪した。

「まったく…私にも選ぶ権利はあるわ。」

「一応聞くけど…レオンは、その候補者の中に？」

「当然いないわ。この先、世界が滅んで…あいつと私がアダムとイヴ的な関係になったとしたら…自ら首を吊って死んでやる。」

「たははは…凄いわれようだねえ？レオン…。」

「あんなのに身体を預けるなら、クリーチャーに預けるわ。」

「クリーチャー以下…。」

苦笑いするシグナルと一緒に、瑠奈は通路を歩いていくと…夜に決行する作戦の準備を始めた。

深夜…。

真っ暗なメインビルの中庭にあるウサギの巣。

ウサギがスヤスヤ眠っているその脇には、大きな藁の山があった。

「…さみいな。」

その藁の山の中には…サイレンサーを付けた拳銃を構える、レオンの姿があった。

《レオン、動かない。》

「瑠奈？」

《何？》

「ベッドで朝までって…これの事か？」

《ご名答。食堂裏に飼われていたウサギは三匹いた…。1匹は同士討ちか何かで死に…。2匹目は私が倒した。恐らく、3匹目もまだグラスハイムに潜伏している筈。》

「…なるほどな？だから、ウサギを飼うって言い出したのか。」

《そう。仲間を失った最後の1匹は、ここのウサギ達をクリーチャー化させようと近づいてくる筈。》

「そこをこのサイレンサーを装着した拳銃で…。」

《そう…狙撃して作戦終了よ。万が一、目標を外したら…一生、ウサギの面倒をみてもらうわ？》

「大丈夫だ…絶対に外さねえよ。」

暫くすると…。

メインビルの内壁を猛スピードで蹴って降りてくる、一つの影があった。

「来たっ!？」

《落ち着いて…元・米軍の腕、見せてもらっわ。》

「任せとけっ。」

その影が眠っているウサギ達に、ゆっくり近づいていく。

「…。」

すると…影の身体から触手が伸びていき、ウサギの身体に次々と絡みついていった。

「…今だ。」

レオンは静かに拳銃のトリガーを引いた。

「!」

額部分を弾丸が貫通し、影が静かに倒れると…眠っていたウサギ達が一斉に目を覚まし、一目散に逃げていった。

「やったっ!？」

藁の中からレオンが飛び出ると、瑠奈が柵を飛び越えて歩いて来た。

「お見事。さすがね?」

「当たり前だっ。」

レオンはクリーチャーの頭部と胸部を撃ち、完全にトドメを刺すと…銃を瑠奈に手渡した。

「呆気ねえ最後だったな？」

「まあ、たまには良いんじゃない？」

瑠奈はそう言う…近くのベンチに置いておいたクーラーボックスから瓶ビールを取り出し、レオンに手渡した。

「ん？…瑠奈、こりゃあ。」

「朝まで時間だいぶあるし…付き合いなさい。」

「ありがとう…ん？」

レオンがふと瓶ビールのラベル脇を見ると、【お疲れ】と書いてあった。

「けっ…ホント素直じゃねえや、ウチの隊長さんは。」

「う、うるさい。」

照れる瑠奈を見ながら、レオンが栓を抜いて一気に瓶ビールを飲み干した。

「あ…足らなかった？」

「ぶはあ！…いや、美味しいビールだっ。今まで飲んだ中で一番美味しいっ—」

「…そつ。」

瑠奈は微笑むと、瓶ビールに口をつけた。

「んっ！…に、苦い。」

「よくよく考えたら…。」

『瑠奈、未成年ですよね？』

「うっ…。」

「ははは！」

翌日…。

ウサギ型クリーチャーの掃討を終えた旨を balan へ報告した瑠奈は、連夜の睡眠不足を補う為…自室で眠りについていた。

「はあ…はあ…。」

夢の中…暗闇の中をひたすら走って逃げている瑠奈。

「…あたいを見捨てたくせに、ウサギは助けるのか？瑠奈。」

「！…か、佳苗。」

暗闇から血だらけの佳苗が現れ、啞然とする瑠奈。

「ウサギは喋らないし、文句も言えない…自分達を囿に使われて、きつとお前を恨んでいるぜ?」

「!…私、そんなつもりは…。」

「瑠奈…お前つて、本当冷たい人間だよなあ?」

佳苗は瑠奈に歩み寄ると、凄まじい怒りの形相で彼女を睨みつけた。

「あたいはお前を許さないっ!あたいを見捨てて、のうのうと生きているお前をなっ!」

「きゃあ!」

瑠奈の上へ馬乗りになり、首を締める佳苗。

「く…苦しい…。」

「死ねっ!…死んで、あたいのいるあの世へ来なっ!永遠にこき使つてやるっ!」

「や、やめて…か、佳苗…。」

「死ねええええっ!」

「いやあああっ!」

勢いよく起きた瑠奈は、汗だくのなか…恐る恐る首を触った。

「大丈夫ね…よ、良かった。」

『…瑠奈。』

「ふ、封魔…。」

瑠奈が振り向くと…ベッド脇に立て掛けてあった封魔の宝玉が光り輝いていた。

『大丈夫ですか？…かなりうなされていましたが。』

「…大丈夫。」

瑠奈はベッドから起き、封魔を掴むと…シャワーを浴びに浴室へ向かった。

『珍しいですね？貴女が私をここまで連れて来るなんて。』

「そう？。」

瑠奈は脱衣所の二段式ラックに封魔を立て掛けると、衣服を脱ぎ始めた。

『また…例の悪夢を見たのですね？』

「…うん。」

シャワーを浴びながら、封魔に瑠奈が答えた。

「私は目の前にいたのに、佳苗を助けられてあげられなかった。夢

とはいえ…私を恨むのは分かる気がする…。」

『瑠奈。』

「何？」

『私には【友達】というものがよくわかりませんが…今までのケースから考えると…【友達】というのは、信頼をおく者を簡単に殺すような者ではありませんよね？』

「ふふふ、そうね。人間の心ってというのは、複雑難解なものなの。その心を持つ人間でさえよく分かっていないんだから。」

『なるほど。』

「人の信頼が憎悪に変わる事なんて…誰しも1回は必ず経験する出来事。」

『では…その佳苗という方が、それに該当すると？』

「佳苗が奇跡的に生きてたりしたら、きっと私の事を恨んでいるでしょうね…。」

瑠奈が悲しそうに俯いている頃…グラスハイムの門兵が、白目をむいてその場に倒れた。

「ごめんな？…ちょっと寝ててくれっ。」

女性は門兵に笑顔でそう言うと、グラスハイムへ入っていった。

「瑠奈…とうとう見つけたぞっ。」

女性はニヤリツと微笑むと、門兵を詰所に運び…BASTARの制服を拝借した。

「あたいの恨み…晴らさせてもらっ。」

朝、隊員らが賑やかに食事を摂る食堂。

「たまには冷奴…食べようかな。」

瑠奈がおかずを選んでみると、周囲でひそひそ話し声が聞こえた。

「?」

瑠奈が辺りを見渡すと、隊員達が彼女を見ながら噂話をしていた。

「井上隊長…昨夜は自分とこの男性隊員と、朝まで遊んでたらしいわよ?」

「嘘…!? まあ、若いから遊びたいのは分かるけどさあ?」

「…。」

瑠奈は無言で飲み物を取りにドリンクコーナーへ向かうと、男性隊員達が彼女を囲んだ。

「…何?」

「井上隊長、昨夜は何したんすかあ？」

「は？」

「とぼけないで下さいよ？」

「皆知ってますよ？隊長が深夜の基地内で男性隊員と淫らな行為をしたって。」

瑠奈はその話しを聞くと、赤面しながら慌てて否定した。

「なっ！？ば、馬鹿な事言わな……ん？」

瑠奈が出入口の方を見ると……レオンが冷や汗かきながら、忍び足で逃げようとしていた。

「ねえ？ちょっと聞くけど……その話して、あのヴァカから聞いたのかしら。」

「はい、そっすけど……。」

瑠奈がレオンを指差すと、男性隊員らは頷いた。

「ふん。」

「……。」

「出入口のところにいる、万年発情期っ！……ちょっと来なさいっ！」

「っっ！」

レオンが真っ青になって、瑠奈に歩み寄る。

「や、やあ！瑠…ぶっ！」

瑠奈はレオンの胸ぐらを掴むと…近くに置いてあった納豆のパックを手に取り、笑顔で問いかけた。

「レオン？付き合い長いから分かるわよねえ？私が普段見せない笑顔でいる時って、大概？」

「は…は…激しい怒りで、目標を一気に殲滅せんと考えている時で、あ…あります…。」

「よろ…しいっ…！」

瑠奈は笑顔で頷くと…納豆を勢いよくレオンの顔面に擦り付けた。

「ぎゃあああっ！ぬるぬるが…ぬるぬるがあ！」

「クリーチャー退治の為に一緒にいただけで、なんで寝た寝ないの話しになのよっ！ええっ！？」

「る、瑠奈っ！俺が悪かつ…ぎゃあああ！」

さつき噂をしていた女性隊員達や、瑠奈に話し掛けてきた男性隊員らが啞然とするなか…。

瑠奈は納豆まみれになったレオンを踏みつけると、朝食を載せたトレーを持って、最寄りのテーブルへ向かった。

「…何。」

「い、いいえっ！」

瑠奈は周囲にいる隊員らへ睨みながら問いかけると、隊員達は一斉に視線を反らした。

瑠奈が席に座ると、隣に誰かが座った。

「…。」

素知らぬ顔で味噌汁をかき混ぜ、口にする瑠奈。

隣に座った女性隊員は瑠奈を見ると…ニヤリッと笑って、彼女の耳元で囁いた。

「見つけた…人殺しの瑠奈。」

「…！」

瑠奈はその声を聞くと、目を見開いて驚き…箸を落とした。

「こ、この声…まさか…。」

瑠奈が震えながら振り向くと…見慣れた女性が笑みを浮かべて座っていた。

「久しぶりっ…瑠奈。」

「か、佳苗…。」

そう…。

彼女こそクリーチャーに殺された筈の瑠奈の親友…【前田佳苗】だった。

B A S T A R の制服を着た佳苗が、不気味に微笑んでいるのを見て…瑠奈は恐怖で震えながら、彼女に問いかけた。

「な…な、何であんたが…し、死んだ筈じゃあ。」

瑠奈が問いかけると…佳苗は瑠奈に顔を近づかせ、笑顔で呟いた。

「あたいはな…お前に復讐する為、地獄から甦ったんだよつ。」

「！…そ、そんな。」

恐怖のあまり…身体の震えが止まらない瑠奈。

「わ、私への…復讐をしに…。」

「そうさ…あの日、クリーチャーの大群が押し寄せてきたあの日…。あたいの運命は変わったんだ。」

数ヶ月前…。

渡海してきたクリーチャーの大群が、千葉県を襲撃した。

火の海になった千葉駅周辺を走る三人の女子高生。

「うわっ！」

「大丈夫！？」

瑠奈が転んだ同級生の女子に駆け寄り、問いかけた。

「平気！？まだ走れるっ？」

「ありがとう、瑠奈ちゃ…！」

同級生が笑顔で礼を述べた瞬間…瑠奈は全身に血を浴びて、真っ赤になった。

「えっ…？」

瑠奈は血を浴びた身体を見つめ、ゆっくり顔を上げると…クリーチャーが爪で同級生の身体を貫き、その首へ噛みついていった。

「うわああ…！」

腰を抜かして尻餅をついた瑠奈の目の前で、クリーチャーがその同級生に群がり始めた。

「…うあああっ…！」

「…！…か、佳苗っ！？佳苗なのっ？」

瑠奈が振り返ると…二体のクリーチャーに退路を塞がれた佳苗の姿

があった。

「か、佳苗…。」

同級生を殺したクリーチャーが口についた血を拭き、佳苗に迫る二体の所に向かった。

「る、瑠奈…助けて…助けてよお…。」

「あ…あ…。」

瑠奈は腰が抜け…あまりの恐怖で絶句していた。

「瑠奈…助けて…瑠奈あ。」

佳苗が涙目になりながら、瑠奈に手を伸ばした時だった…。

「シャアアアツ！」

クリーチャーの一体が、佳苗の首に噛みついたのだ。

「うあああつ…！…あぐつ…！」

腹部、肩…と次々にクリーチャーに噛みつかれ、意識が遠退いていく佳苗。

「か、佳苗…。」

瑠奈が恐怖で震えながら必死に手を伸ばすも…クリーチャー達の足

元から見える佳苗の足は、ひたすら痙攣していた。

すると…クリーチャーの群れの中から伸びていた佳苗の腕が、ゆっくり下へ下りていった。

「！…い、いやぁーっ！」

「……思い出した？」

話しは食堂に戻り…。

その凄惨な殺戮劇を思い出した瑠奈は、頭を抱えながら震えていた。

「あたいは必死に助けを求めたじゃんか…。けど…お前は死にゆくあたいを、ただ見つめるだけだった。」

「違う…違うのっ！佳苗、私の話しを聞いて…」

「どう違うのか言ってみるよっ！」

「…そこまでだ。」

「えっ？」

涙目の瑠奈がゆっくり顔を上げると…バランスが戦闘員を率いて、佳苗の頭に銃口を向けていた。

「交代の門兵から連絡があった。不審者が基地内へ侵入したとな？」

「あたいは、ただ友達に会いに来ただけだぜっ？おっさん。」

佳苗は少しだけ振り向き、バランに笑いながら言った。

「瑠奈：彼女が何故死んでいないのか、わかっているだろうっ？」

「バラン司令…。」

佳苗へ銃を向けたまま、瑠奈を見つめるバラン。

「あの日：瑠奈を助けた時に近くで死んでいた子の一人か。どうやら、クリーチャー化してしまったようだな。」

「同級生のアイツはならなかったけどな？けど、あたいは：死ぬ訳にはいかなかった。」

俯き：頭を抱えて震える瑠奈を、佳苗は睨みつけた。

「親友を見殺しにしたコイツに復讐するまで、あたいは死ねないっ！こんな最低な奴が、BASTAR随一の実力者！？ふざけんなっ！…見ろっ！」

佳苗は前髪を上げると、瑠奈とバランは驚いた。

「おっさんが用心してクリーチャー化しないよう、頭へ撃った弾も…意味がなかったんだよ、あたいはっ！」

佳苗の額には：銃弾が当たってへこんだ痕が、はっきりと残っていた。

「か、佳苗…。」

「瑠奈…お喋りはそろそろ終わりにしないかっ?」

佳苗はゆっくり立ち上がると…瑠奈の胸ぐらを掴んで、無理矢理立たせた。

「あたいがここに来た理由は只一つ。瑠奈…お前をこの手で殺し、復讐したい!それだけさっ!」

佳苗が腰に差した剣に叫んだ。

「天覇…メタモルフォーゼ、ダークサイズ!」

佳苗が抜いた剣の柄にある青い宝玉が光り輝いた。

『ラジャ。ダークサイズ、メタモルフォーゼ。』

天覇の刃が粒子分解され、巨大な鎌に変形していく。

「封魔と同じ機能だどっ!??」

「そんなっ!??」

「瑠奈あ!」

「くっ!」

「…先輩っ！」

佳苗が後ろへ飛び退き、間合いを空けて瑠奈に飛び掛かると…彼女の背後へリイナが現れた。

「先輩っ！封魔ですっ！！」

「リイナ！ありがとう！」

リイナが思いつきり封魔を投げる。

「ちっ！」

「封魔っ！正宗起動っ！」

『了解しました。』

「だぁあっ！」

「はぁあっ！」

鞘から抜いた直後…正宗に変形した封魔で、佳苗の天覇を受け止める瑠奈。

「佳苗、やめてっ！」

「うっさい！人殺しの英雄があ！」

「!…佳苗。」

『瑠奈、気をつけて…彼女が持つ剣は天覇です。』

「天覇?」

『はい。天覇は私の…姉妹になる剣。』

「!…なっ!?!」

「何だっ!?!」

瑠奈とバランスが驚いていると…佳苗が天覇を振りかぶった。

「はあっ!」

「くっ!」

瑠奈がバックステップでかわし、距離を取る。

「封魔…正宗解除っ!青龍っ!」

封魔が光り輝き、薙刀形態【青龍】に変形すると…瑠奈は振り回して身構えた。

「【双龍剣】っ!」

青龍を分割し双龍剣を握りしめると、瑠奈は佳苗へ斬りかかった。

「佳苗えっ!」

「瑠奈あーっ！」

封魔と天覇が、火花を散らしながらぶっかかりあう。

「たあっ！」

「はっ！」

瑠奈は佳苗の天覇を左手に持った一振りを受け止めると、右手のもう一振りを振りかぶった。

「！」

「ここでこれ以上暴れるのは…私が許さないっ！」

「ちっ！」

右手の一振りをバツク転でかわし、そのまま窓辺に立つ佳苗。

「今日は挨拶代わりさ、瑠奈…この前の差し入れも気に入ってくれたみたいだしなっ？」

「！…あのウサギ達！」

「そうさ！お前が悲しむ姿は、最高だったねっ！」

「酷い…それでも、先輩の友達っ！？」

リイナが叫ぶと、佳苗はゆっくり振り返った。

「昔は…な。」

「！」

佳苗の言葉を聞くと…瑠奈は胸を掴んで、悲しそうな表情を浮かべた。

「じゃあな、瑠奈っ！」

「！…ま、待って！佳苗っ！」

「気安く呼ぶなっ！今のあたいは…お前の敵だっ！」

「！…佳苗…。」

食堂の窓を破り、逃げていく佳苗。

「警ら隊へ連絡っ！基地を封鎖しろ！あの女を逃がすな！」

「はっ！」

バランスが戦闘員を率いて食堂を去っていくと、瑠奈は悲しそうに俯いていた。

『瑠奈…。』

「先輩…。」

ゆっくりと窓辺に歩いていく瑠奈。

「佳苗…やっぱり、私を恨んでたんだ。」

そう呟くと…瑠奈は俯いて、静かに涙を流した。

リイナがゆっくり歩み寄り、そつと瑠奈に寄り添うなか…グラスハイム内に警報が鳴り響き、各出入口が次々に閉鎖されていった。

「さすがB A S T A Rの基地だなつ。こりゃ素直に逃してくんなそうだよ。」

『佳苗、暴れるか?』

天覇の青い宝玉が光り輝き、問いかけると…佳苗は笑顔で首を横に振った。

「いんや!あたいの敵は瑠奈だけだ。攻撃してきた奴だけ気絶させ、脱出するぜ!」

『ラジャ。』

激戦、海ほたる（前編）

「いたぞ、逃がすな！」

「ちつくしょ！」

ダダダダ！

戦闘員が佳苗に自動小銃を撃つもかわされ、そのまま追撃する。

「しつこい奴等あ！」

ダーク・サイズを回転させて銃弾を避ける佳苗。

「待てこらあ！」

納豆の粘りからようやく解放されたレオンが、戦闘員らを押し退けて走ってきた。

「ん？…誰かと思えば、瑠奈のオモチャかつ。」

「あん？誰がオモチャだ、こらあ…。」

立ち止まったレオンと佳苗が睨み合う。

「瑠奈の好きな物や大好きな遊び、教えてやるつかあ？」

「わりいが…悪魔に魂を売ってまで、アイツを落としたくはねえ。」

「ははは！あんな人殺しに、そこまでする必要はないって？確かにっ！」

「…ちげえよ。」

「ん？」

「自分の魅力をフルに活かして女を落とすのが楽しんじゃねえかつ。」

「…馬鹿な男つ。」

「けっ…瑠奈にも、よく言われらあ！」

バンツ！

レオンの速射をかわし、天覇を振りかぶると…佳苗は一気に斬りかかった。

「食らええ！」

「甘えっ！」

レオンは腰に装備していたコンバットナイフを抜き、天覇を受け止めた。

「そこらにいる一般兵と一緒にすんなよな…スネちまうぞっ！」

天覇を払い、廻し蹴りを放つレオン。

「くっ！…このお！」

レオンの廻し蹴りを後ろへ飛び退きかわすと、佳苗は天覇を身構えた。

「おらぁ！」

自動小銃を連射しながら接近していくレオン。

「くっっ！」

銃弾を弾く事に必死な佳苗の目の前へ、コンバットナイフを振りかぶったレオンが走り込んだ。

「なっ、速い！」

「場数は…俺の方が多そうだな！」

佳苗が刃を後ろへ飛び退いてかわすも、レオンは遠ざかる佳苗へ自動小銃を連射した。

「くっ！背後からも！？」

佳苗が弾のかすった左腕を押さえ振り返ると…ウインが自動小銃を構えて、佳苗を睨みつけていた。

「逃がさねえ！」

「ちっ！」

「はぁあっ!」

着地した佳苗へレオンが走っていき、廻し蹴りを放つ。

「だぁ!」

二人の廻し蹴りがぶつかりあう。

「くうっ!」

「ちっ!女でも、クリーチャーはクリーチャーだなっ!」

「!…好きでなったわけじゃないっ!」

自分の足をレオンの足に絡ませるとそのまま踏み込み、顔を近づかせる佳苗。

「結構、いい男じゃんか…瑠奈には勿体無いかも。」

「わりいが、化け物女はタイプじゃねえんだっ。」

「ふっ…デリカシーがないなっ!」

「てめえもなっ!」

互いに頭突きを放ち、離れるレオンと佳苗。

「食らいやがれ!」

「だあ！」

レオンが自動小銃を構えると、佳苗は猛スピードで近づき…自動小銃を両断した。

「もらったっ！」

「甘え！」

佳苗の天覇をしゃがんでかわすと、レオンは腰の拳銃を抜いて銃口を向けた。

「もらったぜっ！」

「あたいのセリフだあ！」

ダーク・サイズを持ち替えて一気に斬り上げる佳苗。

「しまっ…！」

「…レオンッ！」

駆けつけたバランスがレオンを抱きかかえ、横に飛び退いた。

「くっそ！」

悔しそうな表情を浮かべ、天覇を肩に担ぐ佳苗。

「大丈夫かつ、レオン。」

「バラン司令…すいません。」

「…佳苗。」

「?…る、瑠奈。」

バランに肩を借り…レオンが立ち上がるその脇を、瑠奈が封魔を握りしめて歩いていく。

「なんか用かよお、人殺しっ。」

「!…ちよっとは人の話しを聞きなさいよっ!!!」

「!…うあっ!」

瑠奈は佳苗を蹴り飛ばし、封魔を握りしめると…一気に斬りかかった。

「瑠奈っ!逆ギレかあ!?!」

「逆ギレしたくもなるわ!言いたいこと言って、暴れるだけ暴れて去って行かれちゃあね!」

瑠奈と佳苗が刃を交える度に、ぶつかる衝撃で火花が散った。

「あたいはお前の親友だぞっ!」

「昔はな…って自分で言っておいて、今更何よっ!」

「!…瑠奈あ!」

封魔と天覇がぶつかりあい、つばぜり合いになる。

『やめてください、天覇！我々は戦う運命ではありません！』

『封魔…お前とは、どちらが上か…はつきりさせておきたかった。』

『天覇！』

封魔と天覇も…互いの思いをぶつけるなか、瑠奈と佳苗が一斉に後ろへ飛び退いた。

「瑠奈っ！親友のあたいを斬って、二度も殺す気がっ！」

「私の友達…佳苗はもう死んだのっ！あんたは…目の前にいるあんたは、只のクリーチャーだっ！」

「…！…瑠奈あ、お前えーっ！」

佳苗が天覇を振りかぶると、刃に黒いエネルギーが蓄積していった。

「ダーク・ウェイブ！！！」

佳苗が黒い真空波を放つと、瑠奈目掛けて一直線に飛んでいった。

「なら…流華一閃っ！」

瑠奈が流華一閃を放つと、赤と黒の真空波がぶつかりあった。

「…だああっ！」

流華一閃とダーク・ウェイブが大爆発を起こすと、瑠奈は煙の中から飛び出るや封魔を勢いよく振りかぶった。

「はああ！」

地面にヒビが入るくらいの衝撃を発しながら、佳苗へ斬りかかる瑠奈。

「瑠奈あ！」

接近する瑠奈を睨みながら、天覇を回転させた後…身構える佳苗。

「佳苗えーっ！」

封魔と天覇が激突し、赤と黒のエネルギーがぶつかりあうと…二人の間で大爆発が起きた。

「きゃあああっ！…くう！」

「うわあああっ！…ぐっ！る、瑠奈あ！」

バック転して土煙を上げながら踏ん張る瑠奈へ、天覇を振りかぶった佳苗が勢いよく斬りかかった。

「！」

「死ねえ！」

瑠奈は横転して天覇をかわすと、横に封魔を構えて斬りかかった。

「はぁぁっ!」

「!…うぁぁっ!」

瑠奈の振るった封魔が、佳苗の額をかすめた。

「うう…。」

額に手を当て、片膝をつく佳苗。

「あ…か、佳苗…。」

佳苗の足下に血が滴り落ちていくのを見て、瑠奈は冷静さを取り戻したのか…手を差し伸べた。

「瑠奈…お前の気持ち、よおくわかったよ。」

「佳苗…!?!」

瑠奈の手を払うと…佳苗は涙を流しながら、彼女を見つめた。

「…許さない。お前だけは…お前だけは、必ずあたいが殺してやるっ!」

「佳苗…。」

「覚えてろっ、瑠奈!必ず…必ず復讐してやるかなっ!」

佳苗は額を押さえたまま勢いよくジャンプすると、グラスハイムの

外壁を飛び越えて敷地の外へ逃げていった。

「佳苗…。」

「瑠奈…大丈夫か。」

佳苗が飛び去った方角をジッと見つめる瑠奈に、レオンが歩み寄った。

「大丈夫…気にしないで。」

「！…瑠奈、お前。」

「…何。」

「…泣いてんのか？」

レオンは瑠奈の頬を流れる涙に気がついた。

「…馬鹿な事言っていないで、食堂の後片付けへ向かいなさい。」

「りよ、了解…。」

心配そうに見つめながらレオンが去っていくと…瑠奈の所にバランが歩いてきた。

「瑠奈…。」

「 balan司令…神様って、酷い事しますよね。大好きな友達とこんな再会をさせるんですから…。」

封魔を地面へ落とし…両手で顔を覆って号泣する瑠奈を、 balan は優しく抱きしめた。

「そう…だな。」

『瑠奈…。』

封魔も balan も何と声を掛ければ良いのか分からず…静かに瑠奈が泣くのを見つめていた。

「佳苗と…佳苗と沢山話したい事だっであつたのにつ！」

「瑠奈。」

「balan 司令…。」

「今の彼女にはお前への怒りしかない…。だが、その怒りを静め…耳を傾けてもらう事が出来るのもお前の他に出来る者はいない。」

「…。」

「今は辛いだろうが…彼女に分かってもらう為には、自分の気持ち を彼女にぶつけ続ける…。そうすれば、いつか再び手を取り合う時 がやってくる。」

「…。」

瑠奈は涙を流しながら…何度も balan に頷いた。

夕焼けで橙色に染まる秋の空を見つめる佳苗。

「…昨年まで、皆と学校に行ってたんだよな。」

天覇を肩に担いで、悲しそうに俯く佳苗。

「瑠奈…あたい、今後どうすればいいのかな。」

佳苗の頬を涙が流れていく。

『佳苗…。』

「天覇…あたい…あたい！瑠奈みたいな人間に戻りたい…。」

瓦礫の上で膝をかかえ、小さくなって泣く佳苗。

そんな…悲しみに暮れる瑠奈と佳苗の姿が、ある場所の広い池の水面に映し出されていた。

「ごめんなさい…。」

水面に映る二人の姿を見て、謝罪する一人の女性…。

彼女は以前、和田教授のパソコンに現れた…あの女性であった。

「けど、仕方なかったの…貴女達が再び手を取り合う為には…。」

「…互いの思いをぶつけあって、気持ちを分かち合うしかありませんからね。」

「…亜南。」

女性が振り返ると…ポニーテールの女性が腰に剣を差し、笑顔で立っていた。

「予定通り…明日から地上へ降ります。」

「無理はしないでね？」

「分かっていますよ…天照^{あまてらす}。」

天照と呼ばれたこの女性こそ、日本を統べる女神…天照大神であった。

「彼女達は私が必ず守ってみせます。」

「あの二人と封魔…そして天覇こそ、地上に巣くう魔を鎮める唯一無二の希望。亜南…彼女達の手助けをお願いします。」

「尽力しましょう…貴女が作り出した新たな封魔剣…【絶魔】と共に。」

亜南がそう言うと、剣の柄にある宝玉が黒く輝き…【絶魔】という文字が表示された。

「まずは、例の女の抹殺から行います…。」

「お願いします。封魔からデータを取り、悪しき事に使おうとしている彼女を止めて…。」

「井上瑠奈の母…井上亜里奈、ですね。」

「彼女は暴走を始めてます。早急に手を打たないと、取り返しのつかない事に…。」

翌日。

制服を着て赤い着物を羽織った瑠奈が廊下を歩いていると…レイナとレイチエルが、喫茶店の前でメニューを見ていた。

「あ、井上隊長っ。」

「二人とも、お茶？」

「はい。先輩…もう平気なんですか？」

「大丈夫よ、ありがとう。」

「ホンマですかあ？」

「ふふふ…ええ、いつか話しを聞いてもらっわ。カづくでもね？」

「あははっ！お友達が可哀想っっ。」

「レイナ…？この前のお返しにケーキ奢ろうとしたけど、レイチエルだけ奢りましょ。」

「やったあ！井上隊長、おおきにっ！」

「えっ！？わ、私も奢って下さいよお！先輩！」

「リイナは、だめっ！」

「はははっ！」

「意地悪！」

瑠奈が笑顔で二人と一緒に喫茶店へ入っていく頃。

廃墟の街の真ん中に、天覇を振りかぶって肩に担ぐ佳苗の姿があった。

「修行にもなりやしない…。」

佳苗の周囲には、おびただしい数のクリーチャーの死骸が横たわっていた。

「…雑魚。」

「シャアアアッ！」

死骸の中に隠れていた1体が飛び掛かってくるも、無言で天覇を振るい…斬り倒す佳苗。

「瑠奈…。」

天覇を担ぎ、廃墟の街を歩いていく佳苗。

リイナやレイチエル達とお茶をして微笑む瑠奈。

そして…。

イギリスのニューポート西部にある山中へ、天照大神の命により舞い降りた亜南。

「B A S T A R 本部 No a はロンドン…研究所はバーミンガムでしたか。」

亜南は腰の剣を見つめると…静かに呟いた。

「絶魔…疾風。」

『御意。』

亜南が微笑みながら身構えると、山林に風が吹いた。

すると…いつの間にか彼女の姿を消えていた。

数日後…。

「いやっほー！」

高速道路を走っていく車の中に、リイナとレイチエルの姿があった。

「海ほたる、行って見たかったやつ。」

「海ほたるって…実際、千葉県南部の海にいたらしいよ？今は分からないけど。」

「へえ？海中を泳ぐ蚩かあ…全然、想像出来んわあ。」

「あははっ！」

この日：リイナとレイチエルは休暇を取り、二人で海ほたるへ向かっていた。

二人が乗った車はトンネルを抜けると、海ほたるへの向かう道に車線変更した。

「東京湾の向かうが、千葉県かあ。」

「井上隊長の故郷やなっ。」

「…そういえばさあ？」

「何？」

「レイチエルって…たまに関西弁が、ごっちゃな時ない？」

「気にしたら負けどすえ。」

「どすえ…って。」

リイナが苦笑いするなか：レイチエルの運転する車は、海ほたるがある東京湾アクアラインに入った。

東京湾アクアライン。

神奈川県と千葉県を結ぶ海底トンネルで、中間には海に浮かぶ人工の島【海ほたる】があり、パーキングエリアとして利用されていた。しかし…。

クリーチャーの日本襲撃時、最大の激戦区だった千葉県は衰退し…観光客は完全に途絶えてしまった。

アクアラインも現在は神奈川県方面から海ほたるまでを走行区間とし、千葉県への横断は原則禁止となっていた。

レイチエルは海ほたるの駐車場に車を停めると、リイナと一緒に最上階にある展望台へ向かった。

「うわぁ〜！東京湾を一望出来るんだあ！」

「お〜！」

二人は東京から横浜方面をゆっくり見渡しながら、反対側の千葉県方面を眺めた。

「ここにいて、戦いなんて忘れちゃいそう。」

「クリーチャーもここまでは来られんなあ？」

海を眺め…幸せそうに寄り添うカップルや、笑顔で話しながら親子連れが歩いていくのを見て、リイナは思わず微笑んだ。

「ふふっ、皆も同じ気持ちなのかなっ。」

駐車場はみるみる車で一杯になり、満車表示が出た。

観光客で賑わう海ほたるのお土産売り場で、リイナ達はお土産を探していた。

「井上隊長には何か買っていくん？」

「うんっ！先輩には、何が良いかなあ？」

リイナが店内の商品を見て回っていると…真っ白なイルカのぬいぐるみがあった。

「あっ、可愛いっ！」

「ええやん！井上隊長に買うん？」

「先輩、皆に怖がられているから…。こういったぬいぐるみをもらって喜ぶような…可愛い一面も実はあるっていう事を、皆にも知ってもらいたいし。」

「リイナ…。」

俯くも、笑顔で話しを続けるリイナ。

「先輩…ホントは、凄く優しく暖かい人なんだよ？」

「知ってるっ。リイナにとって、お姉ちゃんみたいな人だって事もなっ。」

「…うんっ。」

リイナがイルカのぬいぐるみを抱きしめ、レイチエルに笑顔で頷いた時だった。

ドガアアアンツッ！！

「きゃあっ！！な、何？」

「ば、爆発っ！？」

突如、海ほたるの一部が爆発し…建物から黒煙が上がり始めた。

リイナ達が展望台まで階段で上がって外を見ると、神奈川県方面へ向かう海底トンネルの内部から煙が上がっていた。

「トンネルがっ！」

トンネル内部から大勢の人達が走って逃げてくる。

「な、何が起きたんや！？」

「まさか…きゃあ！」

「ま、また爆発っ！？」

リイナとレイチエルが海底トンネルを見ると…トンネル内部から車が次々に海水によって押し出され、道を塞いでしまった。

「海底トンネルに穴が開いたんだ…。」

「か、帰られへん!」

「ク、クリーチャーだあ!」

「えっ!?!」

二人が振り返ると…クリーチャーの大群が千葉県方面から、ゆっくり海ほたるに向かっていった。

「リイナ…。」

「逃げ場も…退路もない。万事休すだよ…。」

一般市民が逃げ惑うなか…リイナは持っていたイルカのぬいぐるみを抱きしめ、空に向かって力一杯叫んだ。

「先輩っ!助けてーっ!」

緊急事態の海ほたるから、北の方角にあるB A S T A R日本支部グラスハイム。

その女子寮の一室で、瑠奈が瞑想していると…封魔の宝玉が光り輝くと同時に、瑠奈も目を開けた。

『…瑠奈。』

「…今、リイナの声が聞こえたような。」

《ピピッ!》

「メール?」

瑠奈は携帯を手に取ってメールを読むと…赤い着物を纏い、封魔を手にして部屋を出た。

「封魔、行くわよ?」

『クリーチャーですね?』

「そう。孤立無援になった海ほたるをクリーチャーから解放する。」

『海ほたる…東京湾アクアラインにあるパーキングエリアですか。』

「そう。」

『本日休暇を取っているリイナとレイチェルが、ドライブに行くと仰っていました。』

「その二人から…メールが来たのよ。クリーチャーに包囲され、退路もないってね。」

『急がないといけませんね。』

「ええ…。」

グラスハイム全域に警報が鳴り響くなか…瑠奈がヘリポートに向かうと、ウィンが出撃態勢を整えて待機していた。

「ウイン…。」

「隊長、いつでも出撃オツケッス！」

「さすが！早いわねっ！」

瑠奈が笑顔でへりに乗り込むと、レオンが自動小銃の手入れをしていた。

「瑠奈、行くか！」

「ええ！ウイン、至急離陸して？海ほたるへ急行するっ！」

「了解ッス！」

グラスハイムから 部隊のへりが、東京湾を目指し飛んでいく。

「リイナ…無事でいなさい。」

「…ん？」

半壊したコンビニから食料を両手いっぱいを持って出てきた佳苗が、空に行くBASTARのへりを発見した。

「あれって…。」

佳苗がビーフジャーキーを噛みながら見上げていると、天覇の青い宝玉が光り輝いた。

『佳苗：あのへりから、井上瑠奈と封魔の反応を確認した。』

「おっ！ホントか？天覇。」

『嘘はつかない。』

「はむっ！…よし！あたかも行くぜ！」

佳苗はビーフジャーキーを食べ終えると、ニヤリッと笑ってへりを追いかけていった。

「瑠奈のやつ、どこ行く気なんだあ？」

佳苗がへりを見つめながら走っていくと、波止場に辿り着いた。

「…げっ！東京湾。」

『どつやら海上で何か起きているようだ。』

「かあ〜！瑠奈が行っちゃうってえ！…ん？」

佳苗が波止場で慌てていると…船体に【警視庁】と書かれた一隻のスピードボートが、目の前を通過していった。

「警視庁？…なんで。」

『佳苗。あの船がやって来た方角へ向かえ。』

「は？なんで。」

『馬鹿か？他にも離岸準備を進めている船があるかもしれないだろ
う。』

「なるほどっ！天覇、頭いいなあ！」

『…はあ。』

「？…よし、とりあえず行ってみるかっ。」

佳苗は波止場を走っていくと…警視庁が所有する四隻のスピードボ
ートが、出港準備を進めていた。

「へへっ、便乗させてもらおっかな！」

大量の置かれたコンテナの後ろから、佳苗がニヤリッと笑って見て
いると、準備を進めている人間の服を見て…眉を細めた。

「【SAT】？…警視庁の特殊部隊が出撃かあ。」

『何か裏がありそうだな。』

「ああ。」

「！…誰だっ！」

「やべっ！」

佳苗が振り返ると…見回りをしていたSAT隊員が、自動小銃を構
えて立っていた。

「何者だっ！ここは関係者以外立入禁！」

「うっせ！」

佳苗は廻し蹴りで自動小銃を蹴り落とすと、刃を鞘に納めた状態の天覇で隊員のみぞおちを打った。

「あがつ！」

「ごめん…ちょっと寝ててくれよ。」

「…今の音はなんだ！」

「やっぱ…。」

自動小銃を蹴り落とした際の音が聞こえたのか…SATが自動小銃を構え、佳苗が隠れているコンテナ付近に殺到した。

「！…どうした！？」

気絶した隊員を見つけ、他の隊員が集まってくると…佳苗はコンテナの上から反対側に飛び降りた。

「結果オーライってやつだなっ。」

佳苗はスピードボートに乗り込むと、操舵室に向かった。

「なあ、天覇。」

『ん？』

「船って…どう動かすんだ？」

『し、知らないのか！？』

「知ってる訳ないだろう！あたいは純粹無垢な少女なんだから。」

『…。』

「だ、黙ってないで何とか言えーっ！」

「…じゃあ、代わりに言っつてやろうか。」

「！」

佳苗の頭に、自動小銃を突きつけるSATの隊員。

「気配を感じなかった…さすが、警視庁特殊部隊っ。」

佳苗がニヤリツと笑って話すと、隊員は自動小銃の引き金に指を置いた。

「不審者は即座に射殺せよ…と矢崎警視正から命令を受けている。」

「命令一つで人殺しかあゝ…日本の警視庁も落ちたもんだっ。」

「何とでも言え…一瞬で何も話せなくなる。」

「…あんたがなっ。」

「な…！」

佳苗は腰にある天覇の柄を勢いよく真下に押すと、鞘が上がってSAT隊員の股間を直撃した。

「ぬうう！」

悶絶し、身動きが取れない隊員に振り返り…苦笑いする佳苗。

「ごめつ、パワーセーブ出来なかった…まさか、潰れた？」

「貴様あ！」

激昂した隊員が自動小銃を向けてくると、佳苗は咄嗟に自動小銃を蹴り飛ばした。

「あつ…！…ひっ！」

天覇を抜き…隊員の額に刃の尖端を当てる佳苗。

「B A S T A Rのへりを追いかけてたいんだつ。この船つ、操縦してくれ。」

「だ、誰がやるかつ。」

SAT隊員が拒否すると…佳苗は天覇で威嚇しながら、笑顔で言った。

「これはお願いじゃなくて命令だ。言う事聞かないんなら、お前を

バラバラにして…クリーチャーの餌にしてやる！」

佳苗が天覇を振り上げると…隊員は慌てて叫んだ。

「わ、わわわ…分かった！」

「…ん？」

他のSAT隊員らがコンテナ裏で気絶していた隊員を抱き起こし、歩いてくると…佳苗の乗ったスピードボートが猛スピードで出港していった。

「速いつ！速いつ！あはは！」

船首で佳苗が笑顔で叫ぶ。

「これで瑠奈を追いかけられるっ！待ってるよ、瑠奈あ！」

佳苗がスピードボートを奪って海路を進んでいくなか…瑠奈達はいいと。

「？…通信ツス。」

「あん？誰だ、こんな緊急時に。」

「警視庁の…矢崎みたいツス。」

「またあの馬鹿かよっ！？」

「で…その馬鹿は何て言っているの。」

「B A S T A R は海ほたる近郊の飛行を一切禁ずる。この件は我々、警視庁が担当…」

「無視ね。そのまま行っちゃって？」

「いいんすか？後で問題にならないツスカねえ？」

「警視庁のやり方でやってたら、海ほたるで退路を失った皆が殺されてしまうわ。」

「同意見だな！今のご時世…必要なのは法やお堅い決まり事じゃねえ。臨機応変に対応する能力だ。」

「…法を守ってないあんたが言える事？」

「がくっ…。」

「ししっ！せっかくキメたのに意味なかったツスねえ？レオンさんっ。」

「う、うるせえ！…さっさと向かいやがれ！！」

B A S T A R のヘリが猛スピードで飛んでいく。

すると…機体に【警視庁】と書かれた三機のヘリコプターが、瑠奈達のヘリに近づいてきた。

「矢崎様のおなぐりい！…てかあ？」

警視庁のヘリのスライドドアが開くと、中から矢崎がBASTARのヘリを見つめて不気味に微笑んだ。

「だから、その笑顔…気持ちワリイんだよ。」

「レオン…夢見悪いから、あれの頭を撃ち抜いて？」

「よっしゃっ！」

「よ、よっしゃっ！…じゃないッス！！」

「ウイン。空から接近は駄目って言ったのよね？」

「えっ？あ…はい、そうッスけど。」

「なら…ウインの操縦テクニックを信用して、お願いしたい事があるの。」

「えっ？な…なんスか？」

平行して飛ぶ瑠奈達のヘリを見つめ、ニヤリッと笑う矢崎。

「井上瑠奈め…いつも事が都合良く進むと思うな。日本を守るのは、我々警視庁と防衛庁だ。」

「ん？…！…け、警視正！？」

「なんだ？」

「バ、B A S T A Rのへりがっ!？」

「なにっ!？」

矢崎が身を乗り出して前を見ると… B A S T A Rのへりが急降下し、海面スレスレを飛行していった。

《こんにちは、矢崎警視正さんっ。》

「!…井上瑠奈っ!何の真似だ!」

矢崎がイヤホンマイクを掴んで叫ぶ。

《空からの接近は許さないんでしょう?…だったら、海上から接近すれば何も問題ないですよね。》

「!?!…き、貴様あ!」

レオンが腹部を押さえながら必死に笑いを堪え…ウインが苦笑いしながら操縦するすぐ隣で、瑠奈はイヤホンマイクを握って矢崎と会話していた。

「ウチには敏腕の操縦士がいるから、大助かりですよ。」

《貴様!ただで済むと思うなよっ!?!》

「矢崎警視正のお顔を拝見したいのは山々ですけど、急ぎますのでこれにて失礼っ。」

《待てっ！井っ！》

イヤホンマイクを外し、ウインの頭へ付ける瑠奈。

「ありがとう、ウイン。」

「ギャハハハハ！あいつの驚いたツラ、傑作だったぜっ！」

「ふふふ！」

「ああ…隊長の温もりと香水の香り…た、たまないッス！」

「ほら、海ほたるに急ぐわよ！」

「了解ッス！しっかり掴まって下さいよっ！」

海面スレスレを猛スピードで飛んでいくB A S T A Rのへり。

そのへりを矢崎は怒りの形相で睨みつけていた。

「狙撃手っ！ライフルであのへりを止める！」

「警視正！？何もそこまでっ！」

「黙れ！…海ほたる周辺の狙撃班に告ぐ！接近しているB A S T A Rのへりを直ちに撃墜しろ！」

へりから身を乗り出した矢崎警視正が、海ほたる近郊を飛行中の部下に無線で指示を出した。

チュンッ！

「へっ？」

「銃撃っ！？」

「矢崎の奴…本気ね。」

『瑠奈…彼は何故、そこまでして海ほたるに行くのを妨害するのでしょうか？』

「さあ…あの海ほたるに、私達が知らない何かがあるのかもね。」

瑠奈が腕組みして立っていると、海面に水柱が立っていく。

「ウイン！当たったらシャレなんねえぞっ！？」

「分かってるツスよ！毎日大事に磨いてるコイツを傷つけるもんツスか！」

へりが左右に飛び、弾丸を回避しながら海ほたるへ飛んでいく。

すると…海面スレスレを飛ぶB A S T A Rのへりに、三隻のスピードボートが接近していた。

「…！SATだあ！？」

「警視庁特殊部隊ね…。」

スピードボートがへりを取り囲み、SAT隊員達がへりのドアに手

を伸ばす。

「…おりゃあ！」

「!…この声っ！」

瑠奈が走って窓から外を覗くと、佳苗がスピードボートの上でSATと戦っていた。

「か、佳苗っ！なんで!？」

「あの女かつ！」

佳苗は次々にSAT隊員を海に落とすと、BASTARのへりに振り返った。

「瑠奈っ！」

佳苗はへりを見るや…親指で『行け!』と指差した。

「佳苗…。」

機内の瑠奈と船上の佳苗が見つめ合う…。

「ふっ…ウイン!このまま海ほたるへ！」

「了解ッス！」

BASTARのへりが速度を上げて、海ほたるに向かって飛んでい

く。

「よしっ、瑠奈は行ったな！」

『佳苗：何故、瑠奈の手助けを。』

「んっ？あたいと瑠奈の真剣勝負を邪魔されたくないからさっ！」

『そうか。』

「ああ！…くっ！」

佳苗の乗るスピードボート周辺に、無数の水柱が立つ。

『遠距離からの狙撃か…。』

「卑怯だぞ…！」

佳苗が空を飛ぶ警視庁のヘリに向かって叫ぼうとした瞬間…次々にヘリが墜落していった。

「な、なんだ？」

佳苗がキョトンとしていると…B A S T A Rのヘリの開かれた後部ハッチに、ライフルを持ったレオンが瑠奈と一緒に笑顔で立っていた。

「瑠奈…あの兄ちゃん。」

佳苗は笑顔でB A S T A Rのヘリを見つめると…迫ってくる残りの

スピードボート二隻に振り返った。

「瑠奈は、あたいが倒す！お前らは邪魔だあ！」

佳苗がSATと戦いを始めると、瑠奈は心配そうに見つめていた。

「佳苗…。」

「借りは作りたくないからな…あいつにはよっ！」

「レオン…ふふふ。」

瑠奈は振り返ると、静かに呟いた。

「…ありがとう。」

「ん？」

「何でもないっ。ウイン、私達は海ほたるに直接降下するわっ！」

「！…まじッスか！？」

「周囲にいたヘリの数からして、もう海ほたるには矢崎の部下が配置についてる筈…。」

「…って事は…着陸もままならないかもな。」

「ええ。そこで、私達は直接降下して海ほたるに侵入する。ウインは囿になって、海ほたるの駐車場へ降下…矢崎の相手をお願い。」

「了解ッス。適当に話しを聞いてやってるッスよ！」

「お願いね！レオン、降下準備っ！」

「あいよ！」

海ほたるを見つめ…瑠奈は封魔の柄を握りしめた。

「待ってなさい、リイナ…レイチエル！今、助けるわ！」

「…おりゃあ！」

一方…佳苗はSATを全滅させ、スピードボートで海ほたるに突っ込んだ。

「いったあ…！」

佳苗が腰を擦りながらスピードボートを降りると、海ほたるの周囲にある消波ブロックの上へ飛び降りた。

「ここが海ほたるかあ…初めて来たぜっ。」

佳苗は天覇を握りしめると、消波ブロックを次々に飛び移りながら…海ほたるへ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2971z/>

《天之女神 - 討魔伝記》 ~ BASTAR・闇を狩る者 ~

2011年12月14日18時49分発行